
導きを導く者

もち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
導きを導く者

【Nコード】
N7533U

【作者名】
もち

【あらすじ】
主人公最強もの。
そこは想像された世界。
そして創造された世界。

現実ではないどこかの世界での現実の青年の物語

プロローグ（前書き）

基本的に主人公は物語（戦争）への介入はしません。

その為主人公なのに出番が少なくなることもあるかと思えます。

思いつくままに書いていますが遅筆なので更新は遅いかと思えます。

所々最初の投稿から編集しなおしています。

プロローグ

- ????: 始原山深部 -

どこまでも澄んだ紅。どこまでも巨大な身体。ソレは身体の至るところからマグマを噴き出していた。

いや、正確にはこれは血液だ。

もはや巨体を支える力も残っていなかったのであろう。

そのまま大きな音を響かせ倒れ伏した。

「やりすぎたか？」

活火山である始原山の深部。

血の匂いが充満し、本物のマグマが存在する中、髪も服も黒一色の異様な雰囲気を漂わせる若き青年は、少しだけの後悔を混じらせながらも何事でもないようなように呟く。

血まみれで横たわっているソレと無傷の人間。

あり得ることではない。

ソレとはドラゴン、最強とも呼称される本来ならば接触を避けるべき種なのだから。

青年は細身であり、争いごとには無縁に感じる為なおさらである。だが不思議とそれが当たり前なのだとも思える光景だった。

「...もう化け物の域だな」

やや悲しげに自虐的な内容を呟くが、ふと思いついたかのように倒れたドラゴンを見る。

息はまだある。当然といえば当然だった。

何も殺そうとしていたのではないのだから。

だが戦闘の理由は一方的なこちらの都合だった。

許してもらえとは思っていないが謝らずにはいられなかった。

「悪いな」と一言謝罪し、青年は火山を後にする。

後に残されたのは、もはや死んでしまっているともとれるが、微弱ながら呼吸をしている角のないドラゴンのみであった。

- 帝国領：帝都：ギルド総本部 -

人種や立場等関係なく、依頼し・請け負う場として世界中から人々が集まる場。

その為、常日頃賑わい活気があるのだがこの日は違った。

『ドラゴンの角の採集』

難度はドラゴンの種類によって変化するが最低でもAである。

そして、今回ギルドに持ち込まれたものは難度の設定が当てはまるような代物ではなかった。

それを青年はたった1人でこなしたのだ。

ギルド内の全ての視線が集中し、誰も口を開こうとはしなかったのは必然と言えた。

受付嬢であるミーナはそんな雰囲気になえきれず、逃げるように自らの仕事を始める。

「依頼達成の確認をさせていただきます。ギルドカードの提示と依頼内容のドラゴンの角を拝見させていただきますか？」

言動はどこもおかしくなかった。

しかし、間違いなくドラゴンのものであるろう全長50メートルはあろうという角が目の前にあるというのに確認する必要があるのだろうか？

青年は周りの様子を気にすることもなくギルドカードをミーナへと手渡す。

「お預かりいたします。…認証完了。採集：Fランカー【ユウ・アヤマ】様でいらっしゃいます…ね。」

ギルドカードを受け取りギルドランクと名前を確認するとミーナは硬直し、周りからはどよめきが聞こえ始めた。

無理もないことだ。

青年は…ユウはギルドに登録してまだ1月も経過しておらず、ギルド内でのランクは最低のFである。

だというのに、熟練者でも達成できない採集を達成したのだ。

誰もが信じれなかったが、誰もが信じるしかなかった。

ドラゴンの角という決定的な代物があるのだから。

しかし、中にはそれを良しとしないものもいる。

彼はその筆頭だった。

「うるせえ！」

たった一声でどよめきは消え、その場には先ほどまでとはまったく別の雰囲気立ち込める。

「ヒッ!?ア…アルテア」

ギルド職員からアルテアと呼ばれた男は怒気と殺意。そして若干の嫉妬、それら全てをユウへと向けていた。

歳の頃20代後半といったところか。大剣を携え、いくつもの傷がついた白き鎧に身を包み、そしてその眼光は鋭い。

「1人で?お前が?ドラゴンを仕留めた?ふざけるな!俺は認めねえ!」

全てを否定し眼光はさらに鋭くなり、もはやギルド内全てを威圧し

ているまでにプレッシャーを膨れ上がらせていた。

「俺と戦え。ドラゴンを殺ったんならその力を見せてみる！場所は中央広場の訓練場だ！」

返事も聞かずに荒々しく扉を開け、破壊し外へと出ていくアルテア。ユウはその姿を見て溜息を吐きながらも入口へと向かっていくと、振り返りミーナに告げる。

「すぐ戻ってくるから報酬の準備しておいて。」

戦闘の前とは思えないその態度にミーナは苦笑いで了承の意を示すしかなかった。

- 帝国領：帝都：中央広場 -

アルテアノス・インカーン

ギルド最高戦力の一員であり討伐：SSランカーであり職業：剣師である若き天才。

誰にも従わず誰とも慣れ合わずひたすらに強さを求める姿に帝都全域に危険人物として知られている。

先日『ドラゴンの角の採集』を失敗した。

よく考えれば訓練場はおろか、中央広場の場所さえ知らないことに気付いたユウはギルド職員に道案内を頼むことにしたのだが、道中アルテアの説明を聞くと『ドラゴンの角の採集』を達成した逆恨みのように感じ再度溜息を吐く。

そもそもユウは目立つことや争いごとを嫌う。

だが、依頼の達成や良い意味でも悪い意味でも有名なアルテアと関

わりを持ったのだから目立たないではいられないだろう。

「ユウ・アヤマ様、もう間もなくで指定された訓練場へ到着致します。」

どうやら、目的地は目の前の大きな建物のようだ。

おおよそ東京ドームと同じぐらいの大きさであり、その外装にはこの国独自の紋様が一面に掘られている。

帝都内の広場には必ず訓練場としての建物が存在し、ここ、中央広場のものは特別製である。

アルテアがここを指定したのもその特別さ故。

高ランクの職業に就くものの訓練は通常の訓練場では耐えることができない。

再びギルド職員の説明がはじまった。

質問してもいないのに説明するその姿は、ギルド職員よりも教師が適任ではないか？と考えるが、説明をするだけで相手が理解できたかなどおかまいなしに授業が進む光景を連想してしまい、考えをすくに訂正した。

では執事などどうだろうか？物腰の低さ、丁寧な言葉遣い。…これも結局は説明している姿しか浮かばず考え直すしかなくなってしまう。

そんなどうでもいい考え事をしているうちに着いたようだ。

内装はシンプルな造りで見学用の観客席と訓練用の草原があるだけだった。

だが外装と同じように紋様が一面に掘られておりしつかりとした造りだった。

その紋様によるものだろう結界が観客席と草原の境界線に張られており安全面も考慮されているようだ。

しかし、何よりユウが感じたのは観客の多さである。完全に観客席は埋まっており、逆に草原にはユウと対戦相手であるアルテアの2人のみで、ギルド職員ももはや座れないであろう観客席へと向かっているところであった。

しばらく観客席を眺めていると突然巨大な刃がユウの頭上へと振り落とされた。

観客をみな突然のことに反応できなかったが皆共通の答えに一瞬でたどり着く。「彼は死んだ」と。

だが、現実は違った。

大剣はユウを切り裂いていたであろう部分全てが消えていた。

これには不意打ちを仕掛けたアルテアも驚愕に目を見開き、次の瞬間には気絶していた。

「…またやりすぎたか？」

そう呟きながら訓練場をあとにするユウ。

何が起こったのか理解できずにざわめきが起こる中1人の男が気付いた。気付いてしまった。

「結果が…ない」

ギルド発祥から1度たりとも傷1つついたことのない結果は完全に消滅していた。

- 帝国領土：帝都：中央広場からギルド本部への道 -
通りに合わせて植えられている陽樹ラクラス。

太陽の光を蓄え夜になると微量ではあるが葉から光が漏れ出る。

その性質から大多数の都では夜道の安全を考え通りに植えられている代表的な自然樹である。

夜の街を照らし出す陽樹の光は幻想的であり場所によっては観光地としても有名である。

最も今は昼間の為そのような光景を見ることはできないが、ギルド内の酒場で夜まで待ってまたここに来ようかと考えていると後ろからの足音に気付く。

人通りの多い道の為もちろん他の人の足音もする。

だが、この足音だけはユウに向かっていているような違和感を感じたのだ。

「まっ…まってください！」

どうやらその違和感は当たったようだ。

振り返ってみるとそこにはフードで顔の下半分しか見えず性別を断定するのも難しい子供が、全速力で走ってきたのか肩で息をしている姿があった。

身長は140？後半といったところだろうか。フードもそうだが着ている服はほぼ緑で構成されており、フードから若干見えている髪は薄い金であった。

ユウの人間関係の中にこのような特徴を持った者はいなかったがおそらく先程の訓練場での事だろうと予想を立てる。

子供は身体が弱いのかそれともただ疲労が残っているのか、いまだつらそうにしている。

だが次の瞬間にはそれら全てはキレイに消えてなくなっていた。

「はあ…はあ…あ？え？ええ！？」

自らの身体に起こった不可思議な出来事に戸惑っている子供。

「これで話ができるだろう？用件はなんだ？」

「あっはい！」

どうやら疑問は一時置いておくことにしたようだ。

「あのアルテアを倒したあなたにおねがいがあるんです！ぼくを…ぼくをきたえてもらえないでしょうか！」

やはり訓練場関連だったか。と予想が当たったことにわずかな喜びを感じはしたがその内容はいただけない。

だが必死になって追いかけてきたのだからそれ相応の理由があるのだろう。すぐに断ることもできるが、判断材料が欲しかったため理由を聞いてみることにした。

「まずは、鍛えてほしい理由を教えてくださいませんか？それによって返事は変わってくる。」

「理由ですか…はい、お話しします。ですが…」

「他には聞かれたくない？」

「はい…すみません。」

「気にしなくていいよ。じゃあ、話は俺の泊っている宿屋で聞こうか？ギルドに少し寄り道するけど一緒に来てくれる？」

「はっはい、よろしくお願いします。」

若干話し方を柔らかくしつつ、いつも通りの足取りでギルドへと向かうユウと、若干緊張しながらユウの1歩後ろを歩く子供。はぐれないようにと服をゆるくつかんでいる姿は顔が見えないにも関わらず可愛らしく、保護欲に駆られる。

もはやユウの中では子供を鍛えることは半ば決定していた。

そのため鍛えてほしい理由が復讐など負の類のものではないことを願うのであった。

- 帝国領：帝都：ギルド総本部 -
ドラゴンの角の鑑定は終わっていたようで、現在依頼主への運搬作業へと移行している途中だった。
受付は今の時間もミーナのようだ。

「あつ、ユウ様おかえりなさいませ。本当にすぐに戻られましたね。」

どこかほっとした感じで愛しむような柔らかな笑顔をユウへと向ける。途端クスクスと先程とは違う種類の笑顔を浮かべているミーナに疑問を抱くがそれはすぐに解決した。
彼女の視線はユウの後ろの、落ち着きなくキョロキョロと周りを見ている子供へと向けられていた。

「可愛らしい弟さんですね。」

ユウには性別の判断はできなかったがミーナにはできるようだ。

「弟というわけではないんだが…まあ、とりあえず報酬を受け取りに来た。」

「かしこまりました。それではギルドカードを提示頂いてもよろしいでしょうか？」

言われた通りにギルドカードを渡すと機械に認識させ空中に出てきたディスプレイを慣れた手つきで操作していくミーナ。
操作自体はおおよそ30秒程で終わった。

「入金が完了致しました。確認をお願い致します。」

ギルドカードを受け取ると預金の欄の数字が変化していた。

預金15000000エル

予想以上の金額だったため若干驚いたが、あつて困るものではないと考えすぐに落ち着きを取り戻した。

「ランクに収まりきれないと判断されたため難度SSの報酬にかなりの色がついた金額となっておりませう。少々贅沢な生活をしても十数年は暮らしていける金額ですが次の依頼を受けられますか？」

「いや、やめておこう。それ以前にもう依頼を受けることはないと思う。」

今後依頼を受けないであろうというユウの発言にミーナは驚きはすれど、納得はいった。

ギルドでの依頼報酬を元手に企業を立ち上げた者は過去に多数いる。成功するかはその人の手腕次第だが、ユウならば成功する。

そう確信できることに疑問を覚えるが成功している姿以外は想像できなかつた。

それだけミーナの中でのユウの評価は高かつた。

もつとも、ユウは企業を立ち上げるなどは一言も言っていないことだが。

「その代わり、この子が依頼を受けると思う。加入受付をしてくれないか？」

「…はえ？」

突然腕を引かれたかと思うとギルドへの加入を進めはじめられ、思わずおかしな疑問の声をあげてしまった子供。

話についていけないようだが、一枚の紙が差し出される。どうやら申込書のようなものだ。

「それでは、こちらの欄全てに記入いただけますか？」

「はっはい！」

記載する内容は少なかったのかすぐに書き終わったようだ。そして、受付の奥にある階段を上り個室へと案内された。

- 帝国領：帝都：ギルド総本部：解析の間 -

「それではただいまより登録をさせていただきます。専門を討伐と記載いただいておりますので身体能力と魔力の保有量の計測も行います。その際解析魔法を使用致しますことをご了承ください。」

何の記載もないカードを機械に設置し申込書を認識させると、同時に子供の足元に青を基調とした陣が描かれる。すると次々とカードに情報が記載されていく。どうやら青の陣は解析魔法、カードへの情報の記載はミーナの魔法による自動記述のようだ。順調にカードへの記載が進んでいくがミーナの顔色が悪くなり始めた。

しばらくすると青の陣が消失し、カードの記載も終了した。

「…お待たせいたしました。これで登録は完了です。」

信じられないものを見たとしてもいような表情をしたミーナからカードを受け取りユウと子供は揃ってカード内容の確認を始めた。

名前：ルルア・クルツ・マドランヌ

性別：男性

年齢：13

種族：ハーフェルフ（ハイエルフ＋精霊）

職業：導師
能力値：体力：E
 ：筋力：D
 ：速さ：B
 ：魔力：S
 ：総合：C +
ランク：討伐：Fランカー
 ：採集：Fランカー
 ：医療：Fランカー
 ：総合：Fランカー
専門：討伐
預金：0エル

まだカードの詳しい内容を聞いていない子供：ルルアにはわからないことだが、一応ギルド登録の際説明を受けているユウとカードの記載をされていて内容を知っているミーナは事の重大さを理解していた。その重大さを理解してもらったためにもミーナからの説明が始まる。

「それではカードの表示についてご説明致しますね。」

種族について

人間・エルフ・魔族・モンスター・精霊・ドラゴンの計6種で認識される。

種族ごとに更にタイプが異なる。

例：エルフ・ダークエルフ・ハイエルフ・エルフルド
ハーフも存在する。

例：ハーフエルフ・亜人等

職業について

基本職 中級職 上級職・特殊職

例：剣士 剣聖 剣師・極剣士

後天性の職業

上級職まではギルドでの試練を受ければ昇格可能。

特殊職は、その職業の特性を真なる意味で極めた者が神より授かる。

種族職

例：勇者・英雄・エルフ王・魔王

それぞれの種族による先天性の職業。

未知職

導師・神子・ドラゴン

世が乱れる時代に出現する以外詳細不明。

能力値について

体力・筋力・速さ・魔力の計4つの能力値が表示される。

それらの平均から総合能力値のランクが決定される。

下からF・E・D・C・B・A・S・SSの8段階で表示される。
鍛えれば上昇する。

ランクについて

討伐・採集・医療の計3つのランクが表示される。

それらの平均から総合ランクが決定される。

下からF・E・D・C・B・A・S・SSの8段階で表示される。
ギルドからの依頼を受けることにより昇格する。

現在のランクの依頼を5回達成、あるいは現在のランク以上の依頼を3回達成するとランクが昇格する。

現在のランクの依頼を5回失敗、あるいは現在のランク以下の依頼を3回失敗するとランクが降格する。

専門について

討伐・採集・医療から専門とするものを登録できる。

登録した専門内容の依頼はランクに関わらず全て受けることが可能。

預金

ギルド、または預所で預けている金額。

ミーナの説明が終わるとルルアが疑問の声をあげる。

「僕の職業って導師ですよ？それで導師は世が乱れる時代に出てくる…ということは、戦争が起こるかもしれないということですか…？」

「そうだろうな。」

濁してはいるが確信に満ちた肯定をするユウ。

「導師とは導く者。道を指し示す者。だが戦争が起きれば権力者は導師という名を利用するだろうな。」

詳細がほぼ不明な職業にも関わらず知っているかのような発言に疑問を感じるミーナ。だが、問いたただすことはできなかった。ユウの放つ空気が変化し問いたただすどころか直視できない程の威圧感を放っていたのだ。

「戦争の中心に立つのは間違いないだろうな。そして、それはおそらく回避できない運命のようなものだ。」

「運命…。運命って何なんでしょうね？」

怒っているとも悲しんでいるとも、だが笑っているようにも受け取れる表現できないちぐはぐな声色のルルア。だが突然それらがあふれ出したかのように叫ぶ。

「勝手に道を決められてそれにしたがうのが当たり前なんですか！死ぬ運命なら死ななきゃいけないんですか！」

恨み、憎しみ、殺意。

それらを孕んだ声で泣き叫ぶ。

「戦争なんて勝手にやればいいんです！僕には関係ない！！僕を巻き込むな！！！」

「それでどうするんだ？逃げるのか？逃げ切れると思うのか？結局は利用されて…死ぬだけだ。」

「…！？」

ユウからの容赦ない死の宣告を受け力なく座り込むルルア。だが次に続いた言葉は予想外の好転だった。

「この際だから鍛えてやる。」

（…鍛えてくれる？）

「生き抜けるように」

（…生きたい）

「意志を貫けるように」

（意志…僕には目標がある。）

「お前が、ルルアがルルアであるために」

（そう…僕はルルア。これだけは誰にも否定させない！）

「運命に抗うか、流されるか。それはルルア次第だ。」

（僕次第…）

ユウから差し出される手、それを強く握り立ち上がるルルア。
その瞳には決意の光が宿り迷いはなかった。

プロローグ（後書き）

呼んでいただきありがとうございます。次話も読んでいただけると嬉しいです。

1話（前書き）

仕事が休みだったのでかきあげることができました。
それではどうぞ。

1話

- 帝国領：帝都：宿屋「旅人の憩」 -

安価で落ち着きのある宿屋として知られる「旅人の憩」

ユウが宿泊している宿屋だ。

ギルドでそのまま今後についての話をしてもよかったが、個室とはいえ人の目や耳が気になるため当初の予定通りユウの部屋へと向かうことになった。

その際ミーナには導師については他言無用であることをお願いしたところ快く了承してくれた。

テーブルを挟んで、安物だがある程度の強度と柔らかさを持っている丸椅子に座っているユウとルルア。

そこでルルアはある違和感に気付いた。

(何でだろう？お兄さんを2人感じる。)

先程まではまったく感じなかった違和感に戸惑いを覚え正直に聞いてみることにした。

「すみません…さっそくですが質問してもよろしいですか？」

「ん？いいぞ。だがその前にその敬語をなんとかしてくれないか？地なら無理に変えるとは言わないが…それといい加減に顔を見せてくれ。」

「えっと…うん。わかったよ。」

緑のフードを取ると中性的なまだ幼い顔立ちの少年が伏し目がちにしていた。

ルルアの耳はハーフェルフではあるがエルフと変わらない長さを持っている。

エルフは個体数が少なくたださえ目立つのだが、最も目に入るものはエルフであることは別にあつた。

おそらく親である精霊の力を受け継いだのだろう、角があつたのだ。封印処理を施されており力の行使はできないようだが、秘めたる力は強大だ。そう断定できるほど力強く大きな角だつた。

だがユウにとってはささいなことだつた。特に気にした様子もなく珍しそうに角を見ている。

そんな様子に安心したルルアは自分の要望を告げる。

「呼び方は兄さんでいい？それから僕のことルルって呼んでほしいんだけど？」

「ん、わかつた、ルル。それじゃあ質問を聞こうか？」

「うん。兄さんの…意志っていうのかな？たましい？それが突然2つあるように感じてどうなってるんだろうと思つて…」

質問を聞くと目を見開き啞然とするユウ。

「…わかるのか？」

「うん、なんとなくでしかないけど。」

「そうか…気付いたなら仕方ないな。」

どこか諦めた口調で溜息を吐くと、突然ユウの膝に甘えるように絡みついている女性が現れた。

ユウと同じく髪も服も黒一色の異様な雰囲気を持っており、髪が無

造作に伸びている為、顔は確認できないがある程度は整った顔立ちをしているであろう予想はできる。

突然現れた女性に驚くルルアであったが直感的に理解した。

彼女がユウのもう一つの意志…魂なのだということを。

「では自己紹介といこうか。俺は綾真優。こちらの呼び方をするならユウ・アヤマだ。そして俺にくっついてるのはユキだ。」

「よろしく」

「はい、よろしくお願いします。僕は…」

「いい」

ユキと紹介された女性は簡単な挨拶をすませると、ルルアの自己紹介を遮りもう用はないとばかりにユウへ更に絡みつく。協調性の力ケラもないような対応にユウは再び溜息をついた。

「悪いな、基本的にユキは全てに興味がないんだ。ああ、それとルルが表現してた俺の魂が2つっていうのはある意味正解だ。魂が根本から繋がっているから俺とユキはある意味同一人物なんだ。」

「嫌われているわけではないんだね…それよりも、たましいが繋がっていることに驚いたかな。それってたぶん個ではなくなるってことでしょ?」

「普通ならな。俺たちは特別だと思ってくれ。さて…そろそろ本題に入るか?」

それ以上は聞くなとも言っつかのように話を打ち切るユウ。

そしてそれを理解したのか今後の方針について自分なりの考えを話し始めるルルア。

夜遅くまで語り合う2人は本当の兄弟のようであった。

- 帝国領：陽光の街アジール -

帝都から山を2つ超え大きな森を抜けた先に、陽光の街アジールがある。

太陽の光を全世界で最も長い時間注がれることで知られ、それ故に陽樹ラクラスの成長に最も適した地であり、観光地としても有名である。

自然樹の人為的な栽培は不可能とされており帝都に植えられていたものもここ、アジールから取り寄せられたものだ。

治安もよく帝国領の中でも評判が良く光の街とも呼ばれている。

そんな街から討伐依頼が入ったのはルルアの方針が決まった次の日だった。

難度：Aの討伐依頼だったが、討伐を専門にしていたルルアはフランクであるにも関わらず受けることができた。まさしく行幸と見えよう。

討伐依頼を戦闘訓練とする。

方針の1つである。

ルルアの総合能力値はC+であったが、今回は実際の戦闘能力の把握という形で2ランク上の難度：Aを、もちろん安全の為ユウも同行することにした。

ユキは留守番のようだ。

「兄さん、討伐対象のグラムってどんなモンスターなの？」

「それを調べるのも訓練の一環だ。ギルドで閲覧できる情報を見なかったのもそのためだ。種類や全長、習性なんかを知らなければ逆にこちらがやられる可能性も出てくる。これが訓練ならいいが、実際は殺し合いだ。やり直しはきかない。」

ルルアは軽い気持ちで聞いたのだろう。だが、返ってきた言葉は非情な現実を突き付けるものだった。

「…そうだね。ごめんなさい、兄さんが一緒に来てくれるからって甘えてた…。」

「わかってくれたのならいい。今回は討伐依頼だが、あくまでも戦闘は最終手段だと考えてくれ。徹底的に情報を集めた上でなら戦闘以外の方法も見えてくる。まあ今回は確実に戦闘になるだろうがな。いつ死んでもおかしくないということだけは忘れるな。」

「はい！わかりました先生！」

覚悟を決めた心はユウからの教えを、心得を余すことなく吸収する。

「先生ね…。ん、それでいいか。じゃあ、情報収集といくぞ。期限は明日の正午まで。その段階で集まった情報をもとに行動してもらおう。」

ユウは宿屋を探しに、ルルアは情報収集のため、街に聞きこみ調査へ。

集合場所は魔法での念話を利用することとしそれぞれ行動を開始した。

- 帝国領：陽光の街アジュール：巨陽樹ラクラス「常陽」 -

観光客が多い為、必然的に宿屋も多くなるのだがそういつた宿屋はしっかりとした造りで豪華な分、総じて宿泊料が高く設定されており必要最低限の金銭しか持つてきていないユウには手が届かなかった。

だが、そのおかげで珍しい体験をできるというのだから何が幸を成すかわからないものだ。

巨大な陽樹を1つの家として見立て暮らしている老人から宿泊を許されたのだ。

色素は抜けてしまっているものの、豊富な髪と髭を持つ70歳を過ぎたあたりであろう容貌をしていた。

「ご厚意感謝します。1日ではありますが何か手伝えることがあればどうぞおっしゃってください。」

「気にしなくてもよいぞ。言動も普段通りで構わんぞい。歳を意識してのことなら尚更じゃ…そもそもワシが年下のようじゃしいう、ユウ・アヤマ殿」

「…最近は何々と驚かされるな。」

見た目から言えば老人が年上であることは間違いない事である。だが、ユウの反応は老人の発言を肯定とあらわしていた。

「常陽が教えてくれたのう。導く者が訪れると…人ならざる者と一緒にな。ああ、常陽とはこの陽樹のことじゃ、良い名じゃろ？」

「常に陽を灯す樹か…確かにこの陽樹ならそれぐらいやってのけるだろうな。いや、実際にやっているからこそその陽光の街か。おそろく始原の自然樹の1柱…違うか？」

「驚いたの…長き時を生きたが故の推測かの？それともこれさえもお主の力…まあどちらでもよい。」

今回は老人が驚く立場となった。

そして、老人の反応もまた、ユウの発言を肯定とあわらしていた。

「そうだな、どちらでもいいことだ。とりあえず探り合いはこのぐらいにしないか？こういったやりとりは苦手なんだ。」

お互いがお互いをけん制し合う口頭での戦闘…。

それは人の思考や感情さえも計算に入れた高度な技術が必要とされるが2人はいと簡単にそれをやってのける。

「このタイミングで切るか…なるほど。まあ、そうじゃな、ここらで終わりにするか…さて、まだ名乗っていないかったの。ワシの名はイオシス…導かれし者じゃよ。」

「だろうな。でなければ色々と納得できない点が多すぎる。」

「ワシとしてはお主の存在の方が納得できんがのう。」

「俺はこの世界ではイレギュラーだ。あまり深く考えないほうがいい。俺の事よりもその導く者について話さないか？この世界の未来について、人ならざる者とな。」

交渉などの相手とのやりとりの中で最も重要なものは場を支配し、相手に有無を言わさぬこと。そして求める情報を餌とし相手を釣り上げる。もちろん、情報とは事前に相手が何を求めているかを知らなければ用意しようもないが、ユウはイオシスと始原の自然樹が繋

がっているという点のみで、イオシスが求める餌とは導く者であるルルア以外ありえないという結論に至った。事実それは当たっており、そのため場の支配云々を飛ばしてさえイオシスは食いつくしかなかった。

- 帝国領：陽光の街アジール：メイルの森 -

陽光の街アジールから目に見える位置に静寂に包まれる森がある。陽樹ラクラスと小動物のみが生息しており、一種の癒しを感じさせ、外界から隔絶されたかのような印象を受ける。

人里での情報収集は既に終えたルルアだったが、入手した情報にはいくつかグラムの行動に不可解な点を感じさせるものが含まれていたため更に情報が必要だと判断しようだ。

そのため、グラムが潜伏しているのであろう森と隣接しているメイルの森を訪れ、情報を求めてひたすらに歩き続けていた。もちろん、隣接しているだけの森に確信に迫れるような情報は期待してはいなかった。だが、ルルアには精霊から受け継いだであろう角による特殊な能力があった。動物、はてはモンスターに至るまで、人語を持ちえない者との対話である。この能力を用い動物から情報を得ようとしているのだ。

このルルアの行動は予想外の結果を生み出すものとなった。

“ 「待つて〜！」 「待て！」 「待つてください！」 ”

突然頭に響いてくる3つの声に驚くルルア。辺りを探ると陽樹に似た雰囲気の小さな苗木がひっそりと植わっていた。

“ 「気付いてくれた〜？」 「気付いたか？」 「気付いたのですね？」 ”

話し方に違いはあるが同じ内容の言葉が再びルルアの頭に響く。

「もしかして…この声は君なの？」

おそろおそろ目の前にある小さな苗木に触れ話しかけるルルア。すると、眩い光が辺り一面を覆ったかと思うと紫・蒼・紅の陣が地面に書き込まれ、その光は小さな子供の姿を形作っていく。

“ 「ぷはあ、やっと出れたよ」 「よし！」 「ようやく出れました」 ”

その姿は物語にでてくるであろう妖精そのものだった。

紫のショートヘアの少し間延びした喋りである少女。

蒼い短髪の鋭い目つきの少年。

紅い長髪のこちらもまた鋭い目つきの少女。

いずれも背に小さな羽を持ち、大きさは50?にも満たない。

“ 「わは〜ありがと〜ごしゅじんさま」 「サンキュー！」 「感謝致します。」 ”

理解が追いつかないルルアであったが、ある程度の予想は既にたっていた。

この子たちは自然樹の妖精なのではないかと。

妖精にしてはあまりにもはっきりとした自我をもっているものの、

それ以外には該当する存在がなかった。

そんな思考をしているとふと先程の彼女たちの言葉を思い返し、気になる内容があることに気付いた。

「君たちが何者なのかよりも気になる言葉があったんだけど…ご主人様って何？」

ルルアの質問は至極当然のものであったが、3人は驚いたような呆れたような目をしていた。

「ごしゅじんさまはごしゅじんさまですよ」「何言ってるんだ？あんたが契約したんだろ？」「膨大な魔力により私たちを自然樹から解き放ち、更に存在を昇華させ契約。主が先程行った内容です。まさか、無意識に行われたのですか？」

これにはルルア自身驚いた。

確かに主従の契約を行う術や魔法の類の知識は持っていたがそれを実際に試したことなどなかったのだ。そのうえ、その内容は召喚術と呼ばれる一時的な主従関係のものであり、今回の契約とは全く別物なのだ。

だが、無意識にとはいえ契約を結んだことに違いはない。今ここにルルアにとって初めての従者が誕生した。

- 帝国領：陽光の街アジュール：メイルの森入口 -
妖精3人の出会いから2時間程で動物たちからの情報を得、今は街へ戻ろうとメイルの森の入口まで戻ってきていた。もちろん妖精も一緒だ。

「メルル、もうすぐで街につくからね。」

“「はい、もりから出たことなかったからたのしみですよ」”

メルルと呼ばれた少女は紫の髪を揺らしながら上機嫌でルルアの腕に抱きついている。

「ドラグム、できれば街の中では暴れないでね。」

“「後であんたが遊んで（戦って）くれるのならいいぜ」”

ドラグムと呼ばれた少年はニヤリと笑うと羽を広げ蒼き軌跡を描きながら真っ直ぐに飛び立った。

「はあ…イーシャル、ドラグムを連れ戻してきてくれない？手荒なまねはできるだけなして。」

“「かしこまりました。それでは行ってまいります。」”

イーシャルと呼ばれた少女はルルアに一礼すると羽を広げ紅き軌跡を描きながら凄まじい速さで飛び出していった。

長女：メルル（紫の髪の少女）

長男：ドラグム（蒼き髪の少年）双子の兄

次女：イーシャル（紅き髪の少女）双子の妹

妖精の名前である。

森の中の会話で3人の妖精は兄弟だということがわかったのだが、名前を持っていないらしく主であるルルアが名付けることとなったのだ。

数分後、頭に大きなコブを作ったドラグムと、それを引きずっているイーシャルが帰ってきた。どうやら妹であるイーシャルの方が色々な意味で強いようだ。

「もお、イーちゃんまたドラちゃんのことたたいたの？女の子

はそんなことしちゃいけないよ」

「…申し訳ありません姉上」

勇猛果敢に見えるイーシャルだがメルルには勝てないようだ。

「それから、ドラちゃんはごじゅじんさまをこまらせたらメッ！だよ」

「わかったよ…ルルア、はしゃいじまって悪かった。」

やんちゃなドラグムもまた、メルルの前では素直のようだ。

「これから気をつけてくれればいいよ。それより、街に入る前には必ず僕の中に入ってね。見られたらさすがにまずいからね。」

妖精とはエルフ以上に個体数が少ない精霊の一種である。

世の中の裏側では人身売買が行われているが、それは妖精もまた含まれている。ならばいくら治安が良くても邪な考えを抱く者は必ずいるものだ。それらの危険を避けるためにも見られないようにすることは必要であった。

それらの説明を予めしていたため、皆素直に契約により可能となったルルアとの同一化を行った。

そして、街へと戻ったルルアはユウからの念話を待つまでの間、妖精たちの観光をすることにした。

1話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
次話も読んでいただけると嬉しいです。

2話（前書き）

主人公の戦闘は設定上どうしても短くなります。
それではごつぞ。

2話

- 帝国領：陽光の街アジール：ラクラス通り -

陽光の街アジールの観光をしていたルルアがユウから集合場所の念話を受けたのは、本来なら空が暗くなっているもおかしくないような時間帯であった。

にも関わらず静寂の闇を眩いばかりに照らし出すラクラスにより昼間とほぼ同じ…とまではいかないが、通常では考えられないような明るさを保っていた。だが、そんな中でもひと際明るく輝く方角があった。

そう、常陽の見える方角である。

山と見間違えてもおかしくないその巨大な陽樹は輝く雪ともよばれる小さな無数の光玉に囲まれ悠然と立っていた。その光景は陽光の街に恥じぬ幻想的なものであった。

この光景にルルアは素直に喜びを浮かべたのだが同一化している妖精にとっては少々問題があるようだ。

“「ごしゅじんさま、あそこには行きたくないですよ」「俺も嫌だ!」「…正直に申し上げますと私もあまり行きたい場所ではありません。ですが、主が行かれるのであれば私達はそれに従うのみです。」”

同一化しているルルアとの会話はできるようで、妖精は3人と常陽のもとへ向かうことを拒否しはじめた。

とはいえ、悪いことをした子供が家に帰るのを嫌がっているようにしか見えない。

「どうしてそんなに嫌がるのかわからないけど、あそこに行かないきゃどうしようもないから我慢してくれない?」

ルルアとしても3人に嫌な思いをさせたくはないが、ユウが待ち合わせ場所に指定したのだから仕方ない。
頭の中で騒ぐ妖精たちをよそにルルアの足は確実に常陽へと向かっていった。

- 帝国領：陽光の街アジール：巨陽樹「常陽」：枝の先 -
ルルアについての話を終え、ひと息ついた後のこと。
それはイオシスからの提案であった。

「模擬戦をせぬか？」

ルルアへの念話を済ませ、後は待つだけだと思考を休ませようとしていたユウにとってはあまり歓迎できない誘いであった。だが、納得はできる。導く者であるルルアの師、ユウの実力がどれほどのものか。導かれし者としてはやはり気になるところであろう。

「突然だな。まあお互いに実力を確認しておくべきか…いいだろう。だが、場所はどうするんだ？俺はともかくイオシスの実力だったら地形が変わるぞ。そこところは大丈夫なのか？」

ユウから見たイオシスの実力はアルテアを超えていた。それはつまりギルド最高戦力以上の実力だということである。

「それについては心配いらんぞい。じゃが、解せんろう。お主とてワシと同程度の実力じゃろうに。」

同程度の実力であると断言するイオシスに対しユウはわずかに微笑む。だがその微笑みはどこか歪みを感じるものであった。

「そこまで高い評価をくれるとはな。どの程度かは戦ってみればわかるさ。さて、その場所に案内してくれ。」

そうして転移魔法陣による移動を行い案内された場所は上空1500m程の高さにある常陽の枝の1つであった。枝とはいえ、その太さは20mを超えている。そこに10m程離れ2人は向かい合った。

「ここでなら全力で戦っても被害は皆無じゃ。」

「確かにな。さすがは始原の存在だ、オリハルコンと同等の硬度をもっている。」

神の涙とも呼ばれるオリハルコンはその強度と硬度により最高の素材と知られている。もっとも存在は確認されておらずあくまでも伝承の中での話だ。

「お主がそう言うということはオリハルコンとは実在していたのかの?。」

「まあな。正確に言えば実在している、だ。そもそも神の涙なんて別名がつくような大層なものじゃないんだがな。∴それは後で話すとしてそろそろ始めるか?。」

「そうじゃな。では∴最初から全開じゃ!!!」

イオシスは叫ぶと同時に気を張り目ぐされていく。すると大気が震えだした。気による単純であり純粹な肉体強化によって場が悲鳴をあげているのだ。全身の強化を済ませると気で構成し具現化した刀を構える。だが対するユウは気も魔力も一切行使する様子がない。

戦闘の構えさえないのである。

(ワシの威圧にここまで反応がないとは…なめているのか？それとも挑発？…何にせよ不気味じゃな。じゃが、思考に浸っている時ではない。)

お互いに言葉を発せず睨み合っていると輝く雪が降ってきた。それは2人の間に静かに降り立ち、そして融けた。それが合図となった。イオシスが抜刀術を放つ。離れている相手に対しては通常ならば意味のない行為だが、その斬撃は空を切り裂きそのままユウへと真っ直ぐに飛んでいく。凄まじい速度で刀を振うからこそ成り立つ技術であった。だが、イオシスの攻めはここで終わらない。刀を振うと同時に足に纏う気による爆発的な脚力によりユウの上空へと場を移す。そして、刀に気を集中させ、空より舞い降り大きく振り抜いた。刀に纏われている気は先程足に纏わせたものを遥かに上回る。この1撃をもってすれば余波のみで民家の1つや2つ破壊しつくす威力である。更には先程放たれた斬撃もある。

(さあ、どう動くかの?)

もはや不可避である攻撃を前にしてユウはどのように動くか、期待半分、面白半分といった面持ちのイオシスだが驚愕に包まれることになる。

アルテアとの戦闘と同様にイオシスの刀が消えさったのだ。違いがあるとするれば刀全体が、そして纏われていた気も 斬撃も全てがはじめからなかったかのように“消失”したことである。

(なんじゃと！何がおこった…いや何をしたのじゃあやつは！…全く動いておらん。そのうえ気も魔力も流動は全く感じなかった。ならばなぜあのような不可思議なことがおこる？やはり人ならざる者

としての力か？だが…)

模擬戦だということも忘れ思考にふけっていたイオシスだったが、それ以上は考えなかった。考えることができなかった。今支配されている感情は恐怖。それ以外の何物でもなく、恐怖対象はもちろんユウであった。場を支配していたイオシスの気が四散していき、かわりに場を支配しものはユウの放つ殺気である。それがイオシスの思考を侵し支配したのだ。とはいえ、殺気は一瞬のことであり既にこの場の支配はとかれていた。植え付けられた恐怖まではめぐえなだらうが圧迫感はなくなつたであらう。

「まだ意識を保っていることには素直に感心するが、それで終わりだ。これ以上の戦闘はできないだらう？引き分けにでもしないか？」

「確かに…戦う意志そのものが奪われた気分じゃ。正直なところお主が恐ろしゅうてしょうがない。だが、なぜじゃ？お主の勝利ではないのかの？」

「俺もこれ以上戦えないからだ。理由は違つがな。」

お互いにこれ以上の戦闘は不可能。よつて引き分け。妥当な判断ではあるが満身創痍のイオシスと違いユウは消耗1つしていない。ほぼ一瞬のやりとりではあつたがこの人外の模擬戦は実質ユウの勝利であつた。

「わかつた…この模擬戦は引き分けじゃ。」

納得のいかない結果ではあるが実際に戦闘はおろか、まともに身体が動かないイオシスは引き分けという提案をのむしかなかった。

・帝国領：陽光の街アジュール：巨陽樹「常陽」・

ユウとイオシスが模擬戦を終え大地へと帰還すると、常陽を眺め呆けているルルアがいた為、声をかけイオシスとルルアにそれぞれ紹介をさせ常陽内の居間へと向かう。

「まさか陽樹に泊れるなんて思いもしなかったよ。」

「俺としては妖精を3人も引き連れていることに驚きだ。」

“「」「ビクッ！」「」”

ユウの言葉に反応する妖精たち。

「僕の中にいるのにわかるの？さすが兄さんだね。3人も出てきて大丈夫だよ。」

すると、ルルアの身体から光が漏れだしそれらは3人の子供を形作っていく。だが…

「…イオシス、何をしたんだ？この子たち、お前を見て怯えているぞ？」

「少しばかりお仕置きをのう…ここまで怖がられるとさすがに罪悪感が出てくるの。」

「うーん、どんな内容だったの？教えてくれる？」

“「何年もろくくじゅにとじこめられました」「おまけに特別製のやつ…」「確かに私たちに非があったのは事実ですがあれはひ

どすぎます…。」

素直にお仕置きについて語りだす3人。その目には若干涙が浮かんでいた。

8年間牢獄樹に縛り付けられていた。

当初は1年間で出してもらえる話だった。

牢獄樹の解呪は魔力を浴びせるといふ単純なものだが膨大な量が必要となる。

牢獄樹の中では妖精の栄養素であるマナを取り込めず力が衰えていき成長も阻害された。

妖精として死ぬ寸前であった。

3人がそれぞれ説明するため要領を得ず仕方なくルルアがわかりやすくまとめてみた。結果的に2つの非難に満ちた視線がイオシスに注がれる。

「イオシスさん…。」

「な…何かの？」

「最低です。人としてどうかと思います。」

「ぐはっ！」

容赦ない一言に吐血しそうな勢いのイオシス。ルルアに抱きつき泣いている妖精たち。その妖精たちをなだめるルルア。

（おそらく初めから妖精をルルアに使役させようと考えていたな。流れをつくるために閉じ込めたといったところか。考えはわからん

でもないがやりすぎだな。それでこの状況は自業自得と…。しかし
なんとも言えない空気だな…寝よう。）

面倒になったユウはその場を放置し寝ることにした。

- ????: 夢の中 -

夢とは誰もが持っているもう一つの世界である。

自らの記憶や願望をもとに作り上げる自分だけの世界。

それは心を映し出した世界とも言える。

本来ならそこにはどのような存在でも介入などできない。

そう、本来なら…

質素なベット。

駆動式の勉強机。

学術書や漫画が置かれている本棚。

電源が入ったままニュースがながれているテレビ。

一般家庭の1人部屋といったところであろうか。そこに2人はいた。

「随分と久しぶりな場所だな…。」

「ユウと落ち着いて話したくて形成した…だけど嫌なら消す。」

「いや、このままでいい。せつかくユキが用意してくれた場だ。夢
の中とはいえ昔を思い出せる。」

「よかった…。」

学生服に身を包むユウとユキ。だがユキの髪はしっかり整っており
色白な端正な素顔が見えていた。

「それで、話ってなんだ？」

「ルルア…あの子を鍛えるのは何故？」

「ん？」

「今まで特に世界に介入したことなんてなかった。生物が、星が、世界が滅びようと何もせずただ傍観するだけ。住めなくなれば次の世界へ移動した。そうやって数えきれない時を生きてきた。」

「…ああ。」

「あの子はこの世界の重要人物：鍛えるということは微弱にだけど世界に介入するということ。ユウもそれをわかっているはず。今更になってどうして考えが変わったのかを教えて。」

質問に対し真剣に考えるユウ。その答えを出すのに夢中ではあるが何時間にも及んだ。その間、ユキは待ち続けていた。

「考えが変わったわけじゃない。多分…同情だな。」

「…同情。」

「俺にはユキがいてくれたから壊れてもこうやって生きていられた。だがルルは違う。他人から言わせれば最低の理由かもしれないがなんとなくっていうのもある。納得させれるようなものじゃなくて悪いな。」

「クス…いいよ。その方がユウらしい。」

「悪かったな…。」

笑うユキにふてくされるユウ。

壊れてしまったユウにはユキが。

何1つ持たないユキにはユウが。

お互いがお互いを必要とし、理解する度に魂はより強く繋がる。

ユウの夢の中にユキがつくりだした過去の風景を持つ場。

そこは確かに2人だけの世界だった。

「ユウ…ユウ？寝た？…普段は無愛想だけど寝てる時は可愛い。」

夢の中で更に夢を見ているユウを膝枕しながら髪をなでるユキ。

「ユキがいてくれた…クス。うん、一緒にいる。ずっと一緒。」

強い想いは人を狂わせる。

「ユウは私。私はユウ。私はユウが好き。ユウは私が好き？」

狂った心は想いをさらに強くする。

「好き。きつと好き。だから一緒にいる。」

それらは延々と繰り返される。

「好き？違う。愛してる。ユウは愛してくれてる？」

どこまでもどこまでも落ちていく。

「きつと愛してくれてる。一緒。一緒。私たちは一緒。」

世界を犠牲にして…。

2話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

少しずつ1話あたりの文章量が少なくなってきました…。

次話も読んでいただけると嬉しいです。

3話(前書き)

戦闘描写って大変ですよね…。
それではどうぞ。

3話

- 帝国領：陽光の街アジール：巨陽樹「常陽」：-

ふと魔力の波動を感じて目が覚めるユウ。あてがわれていた一室の窓から外を見ると既に陽は上っており、それにともない全ての陽樹は眠りにつくかのような静寂さであった。そんな中で人影がいくつか動いている。

「ん？ルルか。…成程、しかしなぜこんな時間に？まあ、一応生徒だし、確認しておくか。」

そこではルルアと妖精たちが模擬戦を行っていた。早朝ということもあるのだろうが、動きはまだ鈍い。しかし、見ているそばから徐々に激しさを増していつている。指導する立場としてはどのような内容でも見ておくべきだと判断したユウはその場を影から見学することとした。

（イーシャルが前衛タイプで剣士職の剣聖か。ドラグムが万能タイプで術拳士職の魔拳士。メルルは指揮兼後衛タイプの…錬金術士？確かこの世界では150年前に途切れた職業のはずだが…まあいい。これは該当するクラスがないようだ。まあ、うまい具合に得意分野が分かれているし、なかなか良い人材のようだ。）

ユウが遠くから眺めながら妖精たちのそれぞれの職業と力量を判断する間にも模擬戦は続いていた。

メルルが錬金術により精製した杖を媒介とし氷属性の詠唱を開始する。

“「そは水を、へんかはおんどを、生じるは氷！」”

周辺の水分が全てメルルの下へと集い温度が急激に低下していく。そして生み出される氷。徐々に大きさを増す氷を見て危険に感じたルルアが即座に妨害に入る。しかし、イーシャルの舞うかのような剣技がそれを許さない。

“「行かせません！一閃！二閃！三閃！四閃！桃源！！」”

魔力を用いた3つの斬撃がルルアの動きを奪う。そして、追の斬撃が正面から放たれた。どうやら対人戦に特化した剣技のようだ。接近戦に対して有効打を持たないルルアには少々骨の折れる技だが対処がないわけではなかった。

「リバーズ：物理反射限定展開、展開対象前面。反射進行対象イーシャル。実行！」

ルルアが予め伏せていた魔法プログラムを展開すると斬撃が全てイーシャル自身へと転進した。しかし驚きはすれど冷静に自らの斬撃を対処するイーシャル。その冷静な対応に思わず感心するユウ。

（剣聖とはいうのは失礼だったか？あの剣技、反応の良さ、冷静な思考。どれをとっても一級品だな。見た目が幼子なだけにかなりアンバランスな感じだが。：ルルアも似たようなものか。あの歳でまさか反射させるとは：おまけにプログラムとして使っている。鍛えてやるとは言ったものの魔法関連は問題ないようだな。俺では相手が“できない”から討伐で成長してほしかったが嬉しい誤算だ。これならグルム相手でも1人でやれるかもな。）

ユウがルルアへの評価を出していると周辺の温度が更に下がりはじめた。どうやらメルルの詠唱が終わったようだ。その頭上には思わ

ず見惚れてしまうような美貌を備えるものの表情が一切ない、青を基準とした鎧を身にまとう氷の美女が巨大な氷槍を構えていた。

“ 「てんしさんかんせいです〜！ドラちゃん！！」 ”

“ 「任せる！」 ”

氷の美女はメルルの魔法による造形物のようだ。メルルが完成を告げると反射により動きがとれないイーシャルのかわりにメルルへの詠唱妨害を阻止していたドラグムが攻めに出た。

“ 「しっかり防げよ！幻闘武！」 ”

気、魔力それぞれによる分身を作りだし全方位からの連撃を繰り出すドラグム。実体化したものと幻を混ぜ合わせたその攻撃はルルアを惑わせ翻弄し、ドラグム自身は遠く離れた位置から術を行使している為反撃を受けることもない。詠唱も短く隙も少ない非常に優れた手である。その反面術自体に高い攻撃力はなく、術者自身の身体能力に左右されるものとなる。基本的には足止めに適した術拳技のようだ。そして術の効果は最大限に発揮された。氷の美女が氷槍の狙いをルルアへとしっかりと定めていたのだ。

（メルルへの詠唱妨害の阻止もそうだったがしっかりと連携がとれている。さすが兄弟といったところか。しかし、ドラグムは性格と合わない能力を持っているな。あの類の術は活発なタイプの性格にはあまり好まれないものだが…。メルルは言うべきところはないな。ある意味で召喚術の域まで達している。優秀な術士だ。）

4人全員の評価が終わり部屋に戻ろうか迷うユウであったが、メルルの放つ魔法とルルアの対応に期待して留まることにした。そして、未だにドラグムの分身に攻められ身動きの取れないルルアに対して

メルルの魔法が発動する。

“「てんしさくん、GOです〜!!!」”

放たれた氷槍は音速へと達するが、速度ゆえの摩擦などで融けることもなくその巨大な姿を維持したままだ。魔道士タイプのルルアには到底避けきれぬものではなかったが、焦ることなく対策を練る。

（これは上級魔法をアレンジしてるのかな？これに対抗できるプログラムとなると…）

「引斥魔法レベル2限定展開、展開対象ルルア・クルツ・マドラン又。指向性-、氷槍の速度低下を目的とする。同時に熱量変化魔法レベル6展開、展開対象速度低下後の氷槍。指向性+、冷気と熱による爆発を目的とする。実行！」

先程イーシャルに展開した魔法プログラムと違い数ある魔法プログラムの中から選出して展開するルルア。その選出に多少の時間がかかるが決まりさえすれば即発動できるのがプログラムの強みである。結果として氷槍がルルアへと到達する前に魔法は発動された。

まず発動されたのは引きあう力を司る引斥魔法である。ルルア自身にかけられた斥力により氷槍は徐々に速度が落ちていく。通常であれば自らに斥力の場を作り出せば周囲のもの全てを弾き飛ばしてしまう。だがルルアが行ったのは限定的な魔法の行使であり、更に斥力は微弱なもので止めてある。今回はそれには当てはまらないようだ。

氷槍が停止しそうになると斥力魔法の効力が消失し、次のプログラムが発動された。熱さや冷たさを司る熱量変化魔法だ。濁った赤の陣が氷槍の周囲にいくつも描かれていき、業火とよんで差支えない炎が暴れまわる。そして氷槍と触れ…

“「おいおい！？シャレにならないぜ！！」”

“「主！姉上！…くっ、近寄れない！？」”

中規模の爆発がいくつも起こる。ドラグムとイーシャルは魔法の射程範囲外にいる為無事であるがルルアとメルルは今も尚爆発している場の中心にいた。

“「イーシャル！どうにかできねえか！？模擬戦なんかで死なれるわけにはいかねえんだ！」”

“「わかっている！だが、どうしようもないんだ…私たちでは近づくことさえできない…」”

「近づく必要はない。そもそも心配する必要がない。」

“「「えっ！？」」”

突然かけられる言葉に驚きを隠せないドラグムとイーシャル。声のした方向に視線を向けるとユウがゆっくりと近づいてきていた。

「2人とも無事だ。それぞれ方法は別だがあの爆発を無力化して今も戦っている。」

“「ホントか！？ホントなんだな！！」”

“「…信じがたい話ですが…わざわざ嘘をつく理由もありません信じましょう。しかしなぜ兄君にはわかるのですか？」”

「実際に見えているからだ。」

魔力も気も一般人と大差ないユウからの言葉では完全には信用はできなかつたようだが、特殊な感知タイプの魔法を使っているのだと判断し、尚且つルルアの兄であると認識しているため、嘘ではないだろうと結論に達したイーシャル。対してドラグムはルルアとメルルが生きているということのみに意識が向き信じる信じないの話しどころではなかつた。何にせよ動きようのない2人はただ爆発している場を見ているしかできなかつた。一方で爆発の中心にいる2人は激しい魔法の打ち合いをしていた。熱量変化系魔法は既にルルアの制御を離れ、氷槍が全て消滅するまで自動で繰り返し発動するようプログラムされており、氷の美女もまた自動でメルルを守ることのみが術式に組み込まれていた。速効性で優位に立つプログラムと詠唱の必要な魔法の違いはあるが、氷の美女によりその差は埋められ互角の魔法戦となっていた。とはいえ、妖精の小さな身体には長時間の戦闘は耐えられないようだ。徐々にメルルの動きも詠唱の速度も鈍りはじめた。

“「うゝ、あゝつゝいゝでゝすゝ！つゝかゝれゝたゝでゝすゝ！」”

とうとう詠唱自体を破棄してしまうメルル。

「そうだね…僕も少し疲れたから終わりにしようか？怪我はない？」

“「はいですゝ。えへへゝごしゅじんさまはやさしいですゝ」”

言うほど疲れているようなそぶりを見せないルルアであったが、それを優しさだと感じたメルルは少し惚けている。そのままメルルを片手で抱いた状態で爆発が届かない安全圏まで歩き模擬戦は終了した。

爆発の中から戻れば先程までいなかったユウがいることに驚いたルルアだったが、リアクションは後にしろと言わんばかりに座らされ妖精たちと一緒に補習をうけることとなった。その際、模擬戦を行った4人の疲労は全て消えていた。

「さて、ルル。模擬戦の反省点：というよりも改善点だな。それを今から言うからしつかり頭にたたき込め。」

“「少々お待ちください。」”

「ん？何だ？」

“「なぜ主が兄君に教わらなければいけないのですか？少なくとも私よりも弱い者に主に教えを説く資格はないかと思えます。即刻このふざけた会を取りやめていただけますか？」”

“「そりゃそうだ。だいたいあんたみたいな弱そうな奴がルルアの兄貴だつてのが信じられないんだよな。」”

はつきりとした拒絶を伝えるイーシャル。そしてそれに同意するドラグム。ユウ自身は対して気にとめるような言葉ではなかったがルルアの成長に差支えると思ったため、そして傲慢に染まりかけているイーシャルとドラグムへの指導の一環としてほんの少しの、本当に少量の威圧をかけた。

“「「ッ！？」”

“「「ほわ〜！？」”

「「につ！兄さん！？」”

直接威圧を受けたわけではないルルアとメルルは身体に負担がかかり驚きはすれどそれだけだった。しかし、イーシャルとドラグムは違った。

“「…ア…ア…」”

恐怖や絶望。負の感情がひしめき合い、言葉一つ発することのできない精神状態まで追いやられていた。いつ心が壊れてもおかしくない状態である。

「ん…加減が難しいな。すぐに治してやるからな。」

一呼吸後には何事もなかったかのように落ち着きを取り戻した2人。しかし、その目にはユウへの恐怖が残っていた。

「怖がらせて悪いな。だが、今のはお前たち2人に対しての指導だと思ってくれ。正直お前たちは契約していようがルルアの傍に置いておくことはできない。実力はあっても邪魔にしかならないだろうからな。」

“「…」”

「傍にいたいというなら俺の話聞いてくれないか？無駄な時間はしないつもりだ。」

“「…」”

「沈黙を了承と受け取った。それじゃあ、改めて始めるか。」

そうして始まった反省会は朝食の時間になるまで続けられた。

3話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
次話も読んでいただけると嬉しいです。

8月2日に人生に関わるような試験があるため次回の更新はそれ以降になります。

4話（前書き）

試験の合格発表は9月になってからのようです。

かなり間があきましたが4話です。

話のつくりがとてもちぐはぐしています。

それでもよければどうぞ。

4話

オリハルコンとは何か：その問いには様々な説がある。

はるか昔に存在した錬金術によって錬金された至高の鉱物である説。世界にあふれる魔力の純結晶体である説。

その他にもあげればきりがなが現在最も有力な説は天上へ住まう神がこぼした涙だという説だ。

だからこそ、神の涙という代名詞もつけられたのである。

しかし、実際には文献にはどういった存在なのかを証明する確たる記載は記されておらず、それ以前にオリハルコンそのものが確認されていないのが現状である。

研究者ならばその真実は何を犠牲にしても手に入れたい最上の議題であり、世界の構造を知る1歩なのだと言われる。

その1歩が今語られようとしていた。

「みんな食べ終わったようだな：さて、今から少し話をしたいがお前たち4人はさつき長々と説教に近い形になってしまったからな：疲れているだろうし聞きたくなければ自由にしてもらって構わない。もちろんイオシスには聞いてもらうぞ？」

「もちろんじゃ、そもそもワシが聞いたことじゃしの。」

「何の話をするのはわからないけど僕は聞いていたいな。兄さんの話には無駄はないし、今後の役に立つかもしれないから。」

イオシスは話題の内容をユウとの模擬戦時に質問したオリハルコンの事だと理解できたため了承し、ルルアはユウの教えを少しでも糧にしようとしているようだ。

「メルル達は少し休んだほうがいいと思うけど…どうする？」

“「ごしゅじんさまが聞くのならのこりまゝです。」”

反省会での件があるためメルルはともかく、ドラグムとイーシャルはユウを快く思っていないと考えているルルアは念のため話に参加するかどうかの意志確認をすることにした。

結果、メルルは即答。

メルルの判断基準は自己の判断ではなくルルアの判断によるものが大きく占めているようだ。

ルルアが行うことならば全てを受け入れる心構えなのだろう。もっとも、ただルルアといたいただけということも考えられるが。あっさりとした決めたメルルであったがドラグムとイーシャルは決めかねているようだ。

それ以前に生気が薄く暗く沈んでいるように見える。

「あゝ…ドラグム、イーシャル。ちょっといいか？」

“「…なんだ？」”

“「…っ…はい。何でしょうか？」”

まるで仇を見るかのような目でユウを見るドラウムとイーシャル。ユウの実力を理解しても納得はできないのがあるいは苦手意識を持つてしまったのか…。

そして、その2人を呆れたように視るユウ。

「ルルの傍においておけないと言ったが…理由はもうわかるな？」

ユウの発言を聞くと2人は威圧の恐怖を思いだしたのであろう、見

てわかるくらい身体を震え上がらせた。

先程と比べると幾分かは正常だがそれでも満足に思考できないことは明白であった。

「昨日の言葉を返そうかの。お主何をしたのじゃ？まさかとは思うがあの殺気を放ったのではないじゃろうな？」

「はあ…殺気は向けていないぞ。あくまでも威圧しただけだ。それも微々たる程度のものだ。だいたい殺気なんぞ向けたら既に死んでる。この世界でならお前を含めて数人にしか向けれん。」

「それは褒められておるのかの？しかし…ワシの威圧を受けてもあまではならんぞ。」

「全力でいけば可能だと思うが？まあ、この件は置いておけ。話の続きがしたい。」

「そうじゃの。」

ユウとイオシスにとっては何気ない会話だが一般的な思考ではついていけないものであった。

ドラグムもイーシャルもともに力量はギルド内でも上位にあたる。

その2人を、ユウの放った威圧は精神崩壊寸前にまでおいやったのだ。

それも微々たるものであったとユウ自身は説明している。

これにはルルアも妖精3人も驚愕するしかなかった。

しばらくして場が落ち着くと重苦しく答えが始める。

“「力ばかりみて現実をみていないから…」”

「そして、他者を認めず我を通しすぎている。」

「そんな考えは成長の妨げにしかならない。」

「正解だ、ちゃんと覚えたようだ。さっきはそれだけ言って後は模擬戦の評価をしていたからまだ不満に思うところがあるだろう。とりあえず今は連れて行くことはできない。だが将来的にはまだ可能性はあるんだぞ。」

ユウの説明に強く反応するドラグムとイーシャル。

一言一句聞き逃さないよう集中し、視線もユウの瞳を臆すことなく見ている。

「お前たちの主であるルルはまだ修行段階だ。そういつた時期に傲慢に染まったやつを近づけるのは避けたい。だがお前たちもまた成長段階だ。もう少し周りを見て学習して、そして力も心も制御できるようにになったらその時は…ルルの手助けをしてくれないか？」

それは許可ではなく願いだった。

それは情けではなく期待だった。

そして…信頼だった。

「お前たちがどれだけルルのことを想っているかは理解しているつもりだ。だからこそ成長すると信じることができる。どうだろうか？俺の案は受け入れてはもらえないか？」

「俺：絶対に強くなってルルアの役に立つ！それであんたを安心させてやるよ！」

「…先程の反省会での暴言、心から謝罪致します。今ならば同行

できぬ理由もはっきりと理解できます。必ずや兄君の期待に応え主の力となりましょう！」

ユウへと誓約を結ぶドラグムとイーシャル。

2人の瞳にはルルアと同様の光が宿っていた。

（僕の手助けということはこの子たちも戦争に関わることになるのかな…？多分、確実に…。僕は生きたい。でも僕だけじゃ駄目だ！メルルもドラグムもイーシャルも生きていてほしい！だから僕が守るんだ！！）

決意の光を宿したもう1人は、更にその光を強めた。

しかしその光は生きたいと思う心とは別の心も孕んでいた…。

………

ユウと妖精間の関係も良好になり、次の話題に移行しようやく当初の内容に入ることとなった。

もちろん、妖精は3人とも揃っている。

「今から話すのは世界中どこを探しても記録としては残っていない内容だ。信じる信じないは各々の自由だがな。質問なんかは最後にまとめてしてくれ。途中でされると面倒だ。」

皆の了承とれる肯きを確認し、語り始める。

「話す内容はオリハルコンについてだ。まずは、オリハルコンは実在するかどうかだが、火のないところに煙は立たない。つまりは実在する。そしてどういった存在なのかは、おおまかな枠に組み込むと生物だ。もう少しわかりやすく言えば意志の宿る無機物だな。神

がこぼした涙が海となり、海から放出された魔力が結晶となり、結晶が人の知恵と技術により昇華され生み出されたものが意志を宿す金属となった。性質としては使い手の心の強さに比例して強度を増す。そして、魔法を無尽蔵に吸収する。オリハルコンが生み出されたのは今からおおよそ1500年前のフェイル帝国が建国されたのと同時期だ。初代皇帝はオリハルコンを武器に加工してその性質を最大限に活かし戦乱を1人で治めた。もともと、偶然の産物だったため一振りの剣しかできなかったがな。その後はオリハルコンの精製は一度も成功せず、精製する術のみが発展しそれが錬金術となった。これで話は終わりだ。質問は？」

「ほう…心に呼応して強くなるか…一度手にしてみたいのう。」

「イオシスなら常陽を破壊するぐらいの強度になるかもな。次は？」

「その剣はどうなったの？」

「初代皇帝と共に墓に埋められた。墓荒らしに何度か狙われたらしいが剣自身が結界を敷いていて墓自体に近づけない状態だ。はい次。」

“「オリハルコンをあんたは作れるのか？」”

「作れるかどうかはわからないが作りたくはないな。オリハルコンは精製に成功すると精製した者は死ぬからな。」

“「なっ！？ではまさかオリハルコンに宿る意志とは精製した者の意志なのですか！？」”

「そうだ。そもそもオリハルコンの精製は魂を練り込んでようやく

成功する。そのことに錬金術師は気付けなかったわけだ。」

“ 「それじゃ、たましいを入れれば必ず成功するんですか？」 ”

「いや、錬金術師としての練度が必要だ。1周りしたからこれで質問はお終わりにする。ルル、そろそろグラムの討伐依頼を進行するぞ。」

「えっ！？あつ！うん！！ちょっと待ってて。」

慌てて準備を始めるルルア。

それについていくは妖精3人。

それを見守るように眺めるユウとイオシス。

ルルア達が部屋からいなくなり静寂に包まれ始めた。

しかし、残された2人の表情は険しい。

「…1つよいか？」

「なんだ？」

「メルルはオリハルコンを精製すると思うか？」

「…可能性はある。正直メルルの前でオリハルコンのことを話したのは失敗したと思っている。」

「強引に話を切ったのはその懸念をつぶすためか？」

「そうだ。イオシス、事が起こるまで3人の面倒をしっかりと見てくれ。特にメルルには気をつけてくれよ？」

「もちろんじゃ。そちらもしつかりと頼むぞ？」

「ああ。」

信頼し合っているのであろう、険しかった表情はお互い笑顔となった。

「ところでいつの間にあいつらと和解したのか聞かせてくれるか？昨日はルルアには冷たい目で見られていたし妖精3人には怯えられていただろ？だいたい、いくらルルと運命付けるためとはいえやりすぎだと思わなかったのか？」

「やはり気付いておったのか？ふむ、単純な話じゃよ。ワシが素直に謝罪し、それをあやつらが受け入れてくれた。それだけじゃ。もともとは仲良くやっておったと自負しておるし、これが当たり前といった感じかの。」

「そうか。事項自得だから昨日は放置したわけだが良かったな。」

「普通本人の目の前で堂々と放置したと言っものか？決めたぞ、お主に何かあってもワシは放置する！」

出会って1日だというのにお互いに遠慮のない会話である。

だが、それだけ打ち解けたとも言えるだろう。

そのままルルア達が戻ってくるまで談笑しながら待っているのだった。

4話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
次話も読んでいただけると嬉しいです。

5話（前書き）

お久しぶりです。

1ヶ月近く更新できず申し訳ありません。

更新できなかった理由は後書きで…。

それではどうぞ。

5話

- 帝国領：陽光の街アジール：ラトラスの森 -

メイルの森と隣接し歪な木々が生い茂る人々の手が悪い意味で加えられていない自然が残っている森。

それがラトラスの森である。

陽光の名がつく街の傍にあるというのに瘴気を放つ森はいつしかモンスターの巣窟と化し、人の踏み込める領域ではなくなっていた。そこにグラムは潜伏している。

情報収集を進めていくうちにそれは確実なものとなり、現在ルルアはラトラスの森まで来ていた。

一般人はもちろんだが、高ランカーであろうと身体に支障をきたしてしまふ瘴気を前に、ルルアは自らの周りに薄い膜状の魔力の衣を纏い中和することで一切の影響を受けることなく森へと歩を進める。これは依頼であると同時に修行である。

よってここからユウの助言は一切ない。

現在1人であるのもそういった理由だ。

もちろんルルアに危機が迫ればユウは助けてくれるだろう。

事実、本人もそう言っていたことである。

そのことを理解したうえでも恐怖は拭えない。

街の人々と森の動物たちから得た情報が間違いないければ討伐対象であるグラムは一般のそれとは全くの別物なのである。

だが、止まるわけにはいかない。

気をしっかり持ち無言で森の中心へと向かうその足取りは覚悟を決めたのかしっかりとしていた。

- 帝国領：陽光の街アジール：ラトラスの森：中心部 -

討伐難度：Aの対象であるグラムとは狼型のモンスターである。

大きいものでも全長2メートル程までしか成長せず、性格は温厚そ

のもので雑食ではあるがどれだけ餓えていても人を、生物を襲うことはない。

群れを成すことはなく、また生殖が存在せず自らの魔力を核とする分身とも言うべき存在を作り出すことで子孫を残していく。

一部の富豪からは用心棒代わりとされており、高い知性を持ち人語を解するモンスターとしては全てが異例の種族である。

だが、どんなものにも例外というものはあるもので、ある条件を満たせば同じ討伐難度：Aのモンスターが霞んでしまう程レベルの違う圧倒的な畏怖の対象となる

それは…子を殺すこと。

『自ら殺されにでも来たか、人間よ。』

1時間程森を歩いた先で出くわしたグラムからの言葉。

込められたものは怒気。

温厚であるグラムからの明確な敵意にもはや疑いようのない確証を得る。

子を殺されたのだ。

しかし、ルルアには不思議で仕方なかった。

敵意を向けられている。

そう、向けられてはいるのだが…全くと言っていいほど害意を感じなかった。

戦闘の意志すら感じられない。

それに負の感情に支配されればまず間違いなく目は濁った色を放つ。にも関わらずグラムの瞳は澄んでいた。

それ以前に子を殺されたにも関わらず理性を保っているのだ。

ルルアの顔からその疑問を察したグラムは敵意を払い語りかけた。

『不思議か？』

「はい…貴方は一般的に知られているグラムとは全く異なる。」

ルルアの街での情報収集とグラムの生態は一致しない点が多すぎた。狼型のモンスターではあるが、大きさが桁違いなのだ。

全長は20メートルは確実に超えているだろう。

体毛は銀色に光り輝いていて神々しささえ窺える。

次に街の被害だ。

アジールのグラムからの被害は皆無である。

この巨大なグラムがアジールを襲ったのは間違いようのない事実だ。だからこそギルドへと討伐の申し出があった。

しかし、怪我人はおるか建物の破損は何一つない。

ルルアの言うとおり一般的なグラムが暴走した際の行動とはかけ離れているのだ。

「僕はルルアといいます。貴方の襲った街から貴方の討伐依頼があり訪れました。」

『その対象を前に堂々としたものだ。どれ、その態度を崩してやるうか？』

臆すことなく討伐であると明かすルルアに対し改めて敵意を向けるグラム。

一触即発とも呼べる空気に一瞬で変わってしまった。

しかし、ルルアには争う気はないようだ。

「堂々となんてしてはけませんよ。どちらかと言えば今すぐに貴方の前から逃げ出したいと思っています。ただ、嘘や隠し事なしでなくては今の貴方と交渉はできないかと思ひまして。」

『ほづ…交渉とな？』

「はい。討伐と先程言いましたが出来ればそんなことしたくありません。それ以前に貴方を倒せると思うほど自惚れてもいません。おそらく全魔力を展開しても数分と持たないでしょう。」

ルルアは自身で驚くほど冷静だった。

普段の優しい雰囲気も也をひそめ、今グラムと対峙しているルルアは全くの別人のようである。

とはいえ言葉通りルルアが全力で闘っても到底倒せるものではない。相手はそれほど圧倒的な存在なのだ。

「あくまでも討伐に限定すればですが。」

だがそれは倒せないということであって手段を問わなければ無力化することはできる。

その実力がルルアにはある。

『なるほど。貴様の魔力なら私をこの地に縛り付けることもできるであろうな。それ故の交渉か。』

ルルアが殺されるかグラムが封印されるか。

確率で言えば五分五分である。

どちらに転ぶかわからない。

故に妥協点を見つけお互い無事に済ませようとルルアは考えた。

「はい。とりあえず確認させていただきたいのですが…街を襲ったのは子供を殺されたから。ですね？」

『そつだ…！あの男は我が子を目の前で殺し…喰らった…！』

「…喰らった？」

『はじめに言っておこう。私は人間そのものが憎い。だが街の人間に危害を加える気などサラサラない。私の目的は奴を喰い殺すことだけだ。邪魔するといふのであれば貴様も殺すがな。』

やはりグラム本来の行動ではない。

子を殺した者が人間なら人間という種全てを、魔族なら魔族という種全てを対象とする

個人を目的とすることなどないのだ。

「邪魔はしません。その考えは同意はできかねますが否定もできませんから…ただ、僕もその人は許せない…。それにそれなら交渉は互いに有用なものとなります。僕がその男を見つけ出します。だから貴方はその間の期間限定で構いません。僕の召喚獣となってくれませんか？」

『召喚獣か…なるほど。それならば私がどこにしようと思えば貴様が奴を見つければ相対できる。私が人の目につかないところにもいけば貴様も依頼は達成とすることもできるといっわけか。』

「その通りです。ギルドや依頼人に嘘をつくことにはなりますがそこは何とかできるでしょう。いえ、します。貴方も怪我をしている状態であまり人とふれあいたくはないでしょうし。」

そう、グラムは現在怪我をしている。

おそらく『男』につけられた傷なのであろう。

体毛に隠れてはいるが全身が切り裂かれたかのような痕があるのだ。ラトラスの森に潜伏していたのもその傷を癒すためである。

『確かにお互い利しくないな…だが、貴様が私を使役できる程の力を持っていないくは話しにらん。奴は私よりも強いのだからな。』
途端空気が張り詰める。

『私と一戦交わってもらうぞ。そのうえで返事をしよう。力を見せてみる!』

解放されるは荒れ狂う魔力の波動。
傷が癒えていないため全力ではない。

だがその実力はやはりルルアの遙か上をいくものだ。

(これほど力に差があるなんて…予想以上すぎるよ。これは封印云々の問題じゃないかもしれぬ。でもやるしない!)

覚悟を決めルルアも魔力を展開する。
それは徐々に場に文字を記していく。

「ルルア・クルツ・マドラヌです。いきます!」

『個体名はドート。いざ!』

先手をとったのはドートだ。

その巨体に膨大な魔力を纏うと性質を炎へと変化させる。
それは先日ルルアが行使したプログラムと同等かそれ以上の業火である。

予備動作なくただ念じるだけで魔力の性質変化を行い、変化後の質も上級魔法並とあればそれは脅威でしかない。

「っ!?! 天冥魔法レベル2最大展開、展開対象ドート。指向性…、

対象を縛ることを目的とする！同時に身体能力変化魔法レベル4展開、展開対象ルリア・クルツ・マドラン又、指向性+、2秒間音速の移動に耐えうる身体強化を目的とする！」

ドートが何をしようとしているか理解したルリアはプログラムを急遽展開した。

選出されたのは光と闇を司る天冥魔法の影を用いた捕縛術である。実体を持たない影により四肢を拘束し身動きをとれなくするもの。しかし、巨体を縛りあげるほどの効力は期待できない。

だが、それでよかった。

ルリアの狙いは捕縛などではないのだから。

瞬間、纏った魔力の性質変化を完全に終えたドートがルリアへ迫る。

「ぬっ！？」

炎を纏った突進。

単純な攻撃故にまた強力でもある。

戦闘力に差があるのならば尚のことだ。

更に大きく避けなくては衝撃破、或いは業火の熱により体力を奪われる。

そう、本来ならばそうなるはずだった。

速度は音速をゆうに超えていたはずだったのだ。

だが現実には遅いとまではいかないが高ランカーならばなんとか対応できる程度の速度である。

「先の魔法か！？」

「正解です。」

ルリアが縛ったものはドートの四肢ではない。

四肢の筋肉の一部を完全に身動きできない状態まで縛り上げたのだ。その際ドートに気付かれぬよう影に筋肉の動きを再現させいかにも力が入っているかのように誤認させた。

結果、魔道士タイプであるルルアでも何とか避けることに成功した。もちろん、避けることができたのは身体強化を行ったためであり、素の状態では確実に当たっていたであろう。

（なんとかなった…でも同じ手は通用しないよね？筋肉の拘束は気付かれた瞬間に解かれたし…確かにレベルは2に設定していたけど、それでも最大展開したものをああまで簡単に解かれるとは思わなかった…。）

ルルアの展開するプログラムには大きな問題があった。

魔法をプログラムとして設定すれば詠唱は必要なくどのような使用かだけ簡単にまとめれば使うことができ、さらにレベル分けすることにより使役する際の選出の迷いをできるだけ少なくできる。

だがそのレベルが問題としてあがる。

レベルにはそれぞれ許容できる魔力が定められておりそれを超える魔力を用いてもそれ以上の効力を発生させることができない。

今回の捕縛術もレベルを最大である9に設定していればレベル2で展開したものより遥かに魔力量が多く効力は圧倒的に上昇する。

短時間ならドートを縛り上げることでもできたであろう。

つまり、予め設定でき即座に展開できるが欲しい出力が得られない可能性がある。

これは魔力の運用の良し悪しや保有魔力の増減で変化するが、同じ魔法を同じ人物が詠唱とプログラムで展開した際の効力はどこまでいっても詠唱が上である。

（まだいくつかさっきの突撃に対応できる方法はあるけど、あちらも突撃だけが攻撃方法じゃないし…このまま後手にまわってたら確

実につぶされる。だつたら！)

「引斥魔法レベル9最大展開、展開対象ルルア・クルツ・マドラン
又及びドート、指向性±、両者の距離を均一に保つことを目的とす
る！！」

戦闘において距離とは重要である。

剣士や拳士はもちろん近距離を好む。

槍士や弓士ならば中距離だろう。

ならば魔道士や術士などは？

もちろん遠距離だ。

例外はあるが大多数はこれに当てはまるだろう。

ルルアが展開した魔法は常に有利な遠距離を確保するためだけに発
動されたものだ。

つまり今から全力で攻撃すると言っているようなものである。

『させぬぞー！』

ルルアの考えを瞬時に読み取りそれを打開するために再び巨体に膨
大な魔力を纏うドート。

しかし、性質は先ほどとは違う。

ただただ身体中から小さな静電気が発生しその規模は見る見るうち
に大きくなっていく。

(静電気…まさか！？雷の速度を再現する気！？まずい、まずすぎ
る！)

ルルアの発動させた引斥魔法は一見有利にしか働かないように見え
る。

相手が接近すれば斥力が働き自らは自動的に後退するのだ。

だがその接近の速度が速ければ？

答えは同等の速度で後退する。

つまり雷の速度で相手が接近すれば自らもまた雷の速度で後退するのだ。

後退と説明するのは不適切だったかもしれない。

それはもはや弾き飛ばされると言っても過言ではないだろう。

音速でもしっかりとした訓練を受けたものでなくては耐えられない。雷の速度など身体があっさりと砕けることは目に見える。

自ら展開した魔法が自らの首を絞める結果となった。

だが、引斥魔法の展開解除を行う時間すら今は惜しい。

どの道やることは限られている。

(今のうちに全力で魔法を展開する！)

ルルアがとれる選択はその一択だけなのだ。

現在展開できる魔法で最も威力のあるものを選択する。

問題点をあげるとすればドートのドートの耐久性を超える程の威力が出せるか。

希望があるとすればドートが雷の性質変化を苦手とすることだろう。

先程の炎の性質変化と比べると随分と遅い。

その為、プログラムを高速展開すればまだ勝てる可能性はある。

「熱量変化魔法レベル9最大展開、展開対象ドート、指向性±、爆発により対象を気絶まで追い込むことを目的とする。以下の手順を可能分同時展開及び魔力が尽き果てるまで繰り返す。実行！！」

ルルアの展開したプログラムは圧巻だった。

ドートの周囲を埋め尽くす程の無数の陣が敷かれると同時に止むことのない爆発を生み出したのだ。

木々は粉々に砕かれ何一つ残すことなく消滅し、大地は深く抉られ、

荒れ果てた巨大なクレーターを次々に作り出していく。
そして今も尚続く視界全てを覆う爆発。
もはや魔法等ではない。

これは災害とよんでも差支えないだろう。
だが…

相手もまた災害であった。

『グウルアアアア！！！！』

突然、響き渡る咆哮。

無数の爆発全てを文字通りかき消し、プログラムの元である陣すらも新たに出現するものも含めてことごとく破壊されていく。
そして、爆発のない一瞬の空白の時間が訪れた。

『さあ！止めてみせろ！！』

完成された魔力の性質変化。

ドートの身体は青白く光る雷を纏い、今まさに飛びかからんとする構えである。

（これで対処できなければその程度だっただけ。協力したところで奴を殺すことなど到底できぬ。ならば必要はない。）

子を殺されたグラムの気性は極めて激しい。

理性の残っているドートと言えどそれは変わらないことであり、人を殺そうとはしないが殺すことに戸惑いはない。

とはいえ、やはり協力者は欲しい。

最後の一手を投じないのは見極めるためである。

ルルアが信じるに値するかを。

そんなことなど知らないルルアだが現状打つ手はもはやない状態だ。展開したプログラムは設定している中で最大の威力を誇る。それを耐えられてしまえば他のいかなるプログラムも効果は期待できない。

詠唱による魔法の行使であればまた話は別だが、そんな時間もない完全に手詰まりだ。

故にルルアのとった行動は自然なものだった。

「負けました。完敗です。」

未だ出現し続ける熱量変化魔法の陣と引斥魔法の効力を解除する為のプログラムを展開させつつ敗北を認めるルルア。

悔しさなど全く感じさせない、それが当たり前なのだと言わんばかりであるその言葉にさすがにドートも驚きを隠せない。

雷を空気中に分解させつつ問いかける。

『…何を考えている？』

「現状を打開する方法は僕にありません。それなら下手に抵抗するよりも負けを素直に認めたほうが生き残れる確率が高いだろうと思っただので。望む力は見せれなかつたでしょうから交渉は決裂ということになるのですが、貴方自身から人を襲うことはないとわかつた以上は執着するつもりもありませんし。」

『…変わった考えだ。今まで見てきた人とは少しばかり違うな。』

「多分その人たちはプライドだとか名誉だとかに縛られてたでしょう？僕はそんなもの持ち合わせていません。強くなり生き残る。それが今の僕のとるべき道であり過程です。ですから醜くても構いません。死ぬわけにはいかないんです。」

力強く、生きたいと言い放つルルアにドートが感じた感情は…愛しさである。

グラムは生に異常なまでの執着を見せる。

それはもちろん子供であろうと変わらない。

『男』に殺される前にドートの子供は必死に生きながらえようとした。

死にたくない、生きたい！と。

特殊な繁殖方法故の少ない個体数であることが起因するのではないか？

いくつかの説はあるが解明はされていない。

だが、その説が正しければドートが感じる愛しさも領けるものである。

ルルアと子供が重ねて見えるのだろう。

姿が違う、現状が違う、目的も違うだろう。

だが生きたいと願う強い想いは同じであり、子供を失ったばかりだということも重なり、もはやドートの頭にはルルアを殺すなどという考えは微塵もつかんでこない。

そして流れる一筋のしずく。

「…どうして泣いているんですか？」

流れたものは涙。

子供を失って感じ続けていたものは怒り。

それ以外のものは感じる余裕さえなかった。

『男』を殺すことだけ考え、自らの身体など省みない。

だが、怒りに満ちた心はルルアへの愛しさに包みこまれ、共に子供を失った悲しみも宿ってしまった。

「泣かないで…。」

優しい声だった。

その一言でドートは倒れ伏しそのままゆっくりと眠りだした。身体だけではない。

心も傷ついていたのだ。

ドートに必要なものは安心できる状態での休息であった。

「疲れてたんだね…おやすみなさい。」

つまり、ルルアはドートに認められたのである。

安心できる、信頼できると。

ドートの銀色の毛並みを撫でながらルルアもまた眠りについた。

- 帝国領：陽光の街アジュール：ラトラスの森：中央部：似非空間 -
ほんの少し位置のずれた空間。

空間がずれているために誰にも認識されることはない。

だが逆に認識することはできる。

それを利用してユウはルルアの戦闘を常に視ていた。

（ほんの少し素が出ていたな。とはいえあの優しさもまた素なんだから極端な性格をしている。…俺も人のことは言えないか。ユキのように一貫性なら楽なんだがな。こればかりはどうにもならないな…俺のことはどうでもいいか。しかし、どちらか寝てしまっただけはさすがにまずいな…仕方ない、どちらかが起きるまでこのままにいるか。）

ルルアもドートも寝ていようが奇襲に対応できるだけの力量は持っている。

が、疲れ果てた状態で対応できるかと言えば難しいところである。

そもそもルルアの安全確保の為にユウはついてきているのだから現状で放置するなどという選択はない。

（戦闘の才能も十分あるし、人脈作りは何の計算もなくできる。今後どれだけ成長するか怖いくらいだな。）

その後、ルルアの戦闘を思い返ししながら評価を下しつつ待ち続けるのであった。

5話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

更新できなかった理由ですが…

結婚間近だった相手と別れたという精神的な問題で全く執筆できなかったのです。

…はい、それでは次話も読んでいただけると嬉しいです。

6話（前書き）

以前言っていた試験ですが無事合格できました。
嬉しいです。

それでは6話目。
どうぞです。

6話

- カラマ共和国・ルクレイン領：定めぬの神殿：神託の間 -
共和国とは国自体が国民のものとする君主が存在しない国家である。
言うならば皇帝と呼ばれる絶対者によって統べられる帝国とは対極
の位置に存在する国家と考えられる。

とはいえ、やはり国としての機能を果たすには国民全体の主義、主張をまとめる機関が必要となる。

そのためにも各地域ごとに代表者を選出し、議論を重ねる国としての方針を決めていく。

その代表者達が現在一同に会している。

そんな中、ただ1人少し離れた位置で立っている女性がいる。

あまり背丈は高くないが目を惹くのは地面に達するまで真っ直ぐに伸びている髪である。

色素を何も含まない白とも言うべきか。

透明に近い真っ白な髪は膨大な魔力を保有しており、治まりきれないのだろう。

淡い光に包まれており常に空気中に魔力を放出している。

その光景にはかり目がいつてしまいが容姿にもまた目を惹かれる。

失明したのであるか？

瞳は閉じられているが誰もが一度は見惚れる美しさだ。

服装は和服と洋服がうまく織り交ぜられた独特のもので不思議さの中に神聖な雰囲気すら感じられる。

彼女の名は『イメリユク・ドトーナ・アニシング』。

ここ、神託の間の所有者である巫女である。

神の言葉を聞くことができると言われる神託の巫女であり、代表者ではないのだが発言権は持っている。

更には決定権まで持ち合わせているのだからその地位は共和制の国家体制の中でもトップと呼べるものである。

代表者達にしても参加してもらいその見解を聞きたいに違いない。だが今回に限ってイメリユクは不干涉を貫いていた。最終的な判断は巫女に委ねられるとはいえ議題が議題だけに代表者達は不満を抱いているようだ。今回の議題は：帝国方面にて発生した膨大な魔力の流動。計測された魔力値は中規模な戦と同等のものであった。内乱の可能性を提示する者もいれば、戦争の準備をしているのではないかと危惧する者もいる。そんな会話さえもイメリユクの頭の中には一切入ってこない。

(どうして…。)

思考を占めるのは疑問と困惑。

(どうして私は知らないの?)

過去にも他国の不審な動きの際、代表者を集め皆で話し合い情報をまとめ国の方針を決めたことは何度もあったが、その全てにおいて神託が下っていた。

だが：今回はそれが無い。

これほど大規模な出来事ならば神託が下っていることが当たり前であり、神託に依存し続けてきた結果、現状は心が壊れてしまってもおかしくないほど取り乱していた。

だからだろうか、普段の精神状態ならば決して選ばない判断をしてしまった。

帝国との戦争に向けてという名目での軍備拡大、巫女による議題の決定権の廃止。

これらの決定に対して国民は何の抵抗もなく受け入れた。

なにせ巫女が決定した政策だ。

それは帝国との戦争が確実なものだと証明しているに他ならないが、

神託さえあれば心配はないというのがカラマ共和国での一般的な考え方なのだ。

実際には神託が下ったわけではなくイメリユクの自暴自棄な決定ではあるのだが、その事実さえ知らなければ不満などであるわけもない。代表者にしてもそれは変わらず、その決定に異議を唱える者などいなかった。

- ゲイル魔国領：首都ルヴァイ：王城 -

鬼や天狗、吸血鬼や淫魔などの文明をもちえ、姿が人間に近い者のことを魔族と称する。

モンスターの上位存在と捉えられることが多いがそれは間違いであり、彼らは人間と共に生きることを選んだ、モンスターからすれば裏切り者なのだ。

だが、現在は共に生きる人間との間に大きな亀裂が入っており外交も内政もままならない状態にある。

事の発端は人間の間で新たに信仰されはじめた教えによるものだ。

人間を至上の存在とし、他の存在を否定する歪んだ思想。

名を『ベントー教』という。

その思想に賛同し魔族を、そしてエルフを、モンスターを駆逐しようとして独自に動いているものまでいる。

魔族にとって救いなのは帝国と島国である灯国には全く賛同者がいないことだ。

言わずと知れた強国である帝国やそれに対抗し得る灯国が動けば文字通り駆逐されかねない。

魔族として決して弱くはない。

鬼の力、天狗の速度、吸血鬼の特殊能力、淫魔の誘惑、他にも多数の種族が存在しそのどれもが人間には持ちえない能力を有している。だがそれらは圧倒的な力を前にすれば無力に等しいものであり、帝国も灯国もその圧倒的な力が存在しているのだ。

だが、今後もそれらの国に賛同者が現れないとも限らない。

故に魔族の王『ステイング』は悩んでいた。

ベントー教徒にとつて魔族とは敵対の有無に関わらず駆逐する対象であり、友好的な関係を築き上げていた人間が治める隣国とも争いが絶えない状態に陥ってしまった。

これだけでも重要な問題だ。

だが、そこにきて帝国方面にて膨大な魔力の流動が確認された。帝国までも敵と化した。

そう考える者がいても不思議ではない。

「やれやれ…どうにか民の不安は抑えることはできたが問題は山積みだな。」

愚痴をこぼすかのような言葉しか出てこないことに自覚している以上の疲れを感じるものの机に束ねられた書類に目を向けるステイング。

ここは彼の実務室であり、ここ最近では会議室との間を往復する毎日で自宅に帰ることさえできない。

彼は本来、血が空気に触れ固まった際の黒くも感じる赤色の少しばかり長い髪を後ろにまとめ、細身の眼鏡をかけた外見をしているのだが、いかんせん忙しい毎日をおくっているため髪は乱れ細身を通り過ぎ少しやつれている。

「ベントー教徒の対応、帝国で発生した魔力の調査、今後我が国のとるべき道…耐えがたい重圧だな。だが…」

一度、呼吸を挟み改めて言葉に出す。

「だが、護らねばならん。民のためにも。そして、我が子の為にも。」

ステイキングは魔族の中では若いほうにある。

それでも王としてやっていけるのは類いまれなる政の才によるものだろう。

そして彼には先日初めての子供が産まれた。

次世代の王の誕生に国民は自らのことのように喜び、毎日のように感じていた不安は一時的にだが振り払われていた。

だからこそ民も子供も護りたいと心から思うのであった。

・ミリタリー又国領：首都エメラルダ：王城：王子私室・

森に住まい自然を守る。

それがエルフの存在意義であり誇りでもある。

だが、この自然の定義は一般のものとは少しばかり違う。

まず自然と聞いて考え付くものは環境的な意味としてだろう。

美しい森、清らかな水の流れる川、淀みのない空気。

それらは確かに自然であり、大切なものだ。

だが、エルフの考える自然とは異なるものである。

どれだけ木を伐採されようと、どれだけ川を、大気を汚染されようとエルフはそれを受け入れる。

もしもエルフという種が他種族の手により滅びようと、それもまた自然なのだを受け入れる。

これがエルフの自然である。

つまり自ら状況の改善や改悪を行うことはなく全てに身を任せる、それがエルフの本能である。

これらを考えればルルアは特殊なのかもしれない。

ハーフとはいえ、ユウに師事し目的に向かって進もうとしているのだからエルフの行動としては考えにくいものである。

だが、それはルルア1人ではなかった。

（先の魔力は間違はなく同胞のものだった。あれほど激しい魔力を用いるなど一体何事なのだ？最近ではベントー教などという危険な教えも広まっているらしいが、まさかその被害に？くそっ！何にしても情報が少なすぎる！父上もこれぐらいの事など気付いているはず、何故動こうとしないのだ！）

自ら前へと進む意志を持つ異端のエルフ。

ミリタリー又第二王子『ガルド・ラル・レイトナル・リーヌ』

ミリタリー又国では必ず二子を儲けられ第一子にはミリタの姓を、第二子にはリーヌの姓をそれぞれ与えられる。

そして、王として即位した者はミリタリー又の姓が与えられる。

その際、王と成りえなかつた者は姓を奪われる。

歴史上、リーヌの姓を持つ者が王として君臨することはなく、一般的にエルフならばそれもまた自然なのだと考えらるだろう。

だが、リーヌの姓を与えられたものには必ずある傾向が浮き出ている。

ガルドがそうであるように前へと進む意志を持っているのだ。

よって歴代のリーヌの姓を持つ者は皆国を出た。

この日、今代のリーヌもまた国を出ることとなる。

（父上、母上、兄上、私には黙って全てを受け入れることなどできません。助かるかもしれない人を目の前にして何もしないなど、受けいれではなくただ無慈悲なだけではないですか？あの魔力を放った同胞が何者なのかも、力になれるかもわかりませんが…行ってきます。）

これは偶然なのだろうか？

ミリタリー又国では成人の儀は22歳で行われ王へ即位する権利を有する。

ガルドの兄は本日とその成人の儀であり、そのまま即位することを

選んだ。

よって、現在ガルドはリーヌの名を失っているのだ。

ならばただのエルフとして国を出ることに何の問題もないだろう。

かくして、国を捨て、名を捨て、ガルドという名前だけを手元に残し若きエルフは旅立つ。

その誰よりも長き耳に誇りを、誰よりも逞しい肉体に信頼を宿し目的の人物のもとへ…。

- 灯国領：首都日：上空 -

他国との外交を完全に絶ち独自の文化を築いた和の島国であり、帝国に対抗することが出来る唯一の国と言われている。

だが、土地の9割が山で占められている特殊な環境による食料不足や、人口の少なさによる兵不足が問題に浮上する。

おそらく長期間の戦争となれば敗北は免れないだろう。

とはいえ、もともと灯国には戦争という概念が存在しない。

それはそうだろう、争う必要がないのだから。

少ない土地をわざわざ海を越え奪いにくる国があるだろうか？

豊富な資源が存在するというのなら話は別だが、有用な資源など見つかつてはいない。

では、戦争という概念がない国が何故強大な帝国に対抗することができるのか？

それは、非常に簡単な理由である。

国を守護するドラゴンがいるのだ。

この場合はドラゴンではなく龍と言いかえるのが適切かもしれない。なにせ、灯国では守り神として敬われているのだ。

守護龍『ツイートリス』

守り神の名である。

ドラゴンとは異なる蛇のような長く碧き身体に雷を常に纏う、灯国を覆い尽くすほど巨大な正に威風堂々といえる姿である。

守護龍と呼ばれてはいるが、その本質は破壊にある。身体そのものを鞭のように用いた打撃はそれだけで小さな島を沈めてしまう。

圧縮した魔力を口から放てば海が割れる。

雷鳴を轟かせれば世界が終わる。

言い伝えに過ぎないが事実であればそれは天災である。

そんな天災は現在、自らが守護する領域を離れ人間では到底到達できない程の高度にてある一点をにらみ続けている。

『…』

どうやら、視線の先にある何かを危惧しているようだ。

その金色に輝く瞳には焦りの色がみてとれる。

『…どうやらまだ目覚めるまでには至っていないようだな。』

そう呟くと視線を外し灯国へと舞い降りていく。

先程までの焦りは消え、瞳に映るは人々が生活する日常。

『我は護る。優しき世界を。愚かにも美しい死せる者を。』

その光景を心から護りたいと願う守り神は一言呟くといつもと変わらない日常へと戻っていく。

ただただ灯国を守護するという日常へ。

- 帝国領：首都フェイル：皇城：謁見の間 -

世界は3つの大陸で形成されている。

1つ、モンスターの楽園であるセメト大陸。

1つ、カラマ共和国やゲイル魔国、ミリータリーヌ国、他にも無数

の小さな国々が治めるスベラキア大陸。

そして最後の1つ、帝国が治めるブルトゥラ大陸。

他にも灯国等が治めている無数の島々もあるのだが大陸という分類にはできない。

規模を見てみれば2：1：4といったところだ。

つまり帝国領はとてつもなく広大な大地だといえる。

広ければそれだけ政治はうまくいかないものであり、どれだけ有能なトップであろうと全ての土地の管理などできるわけもなく他の者に任せるしかない。

そして任された者の手腕によって土地の良し悪しは変わってくる。

中には自らの利益を求め圧政を行う者もいるだろう。

だがそれは知性を持つものならば仕方ないことでもある。

誰にでも欲はあるもので、それを手に入れられるとすれば多少の罪悪感など微塵もかけない者が多数だろう。

しかし、それは容認されていいことではない。

故に誕生したのが十二騎士という特殊機関である。

ブルトゥラ大陸の12方に配置された帝国最強の12柱の騎士。

彼らは国を護る盾であり剣であり不正を暴く裁判官でもあり、その活躍により貧富の差は他の国々と比べても格段に軽いものとなっている。

もちろん、全ての不正を取り押さえることができているわけではないが、彼らの存在が帝国を支えている大きな支柱となっていることは間違いない。

その十二騎士には存在しないはずの13人目が存在する。

12柱の役割が治安維持だとするならば残り1柱はその存在理由そのものが違う。

だからこそ、彼は皇帝の前へと姿を現した。

大聖堂のような装飾が施された謁見の間には1つしか座がない。

そしてそれは皇帝の座でしかなくそれ以外の者は全てひれ伏す。

国民から英雄視されている十二騎士であってもまた、それにあては

まる。

しかし、たった1人例外が存在した。

それが13人目の十二騎士『サイト・シュツルム・フェイル』である。

黒髪黒瞳で短髪、身を包む衣は旅人のそれであり到底騎士には見えない、あえて言うならばどこにでもいそうな特徴のない容姿の男性である。

一見すると何も突出する点はない彼だがその名前が問題だ。

フェイルとは初代皇帝の名であり、皇族ならば必ずその名を有するしきたりがある。

つまり、サイトは皇族である。

だが、彼は一介の騎士となり帝国へと忠誠を誓った。

そして現在、あまりにも礼に欠いた態度で皇帝と向き合っている。まず、頭を下げていない。

「フフ：お久しぶりです。サイト様」

どこか妖しい笑みを浮かべ語りかける幼さを残す女性。

長い歴史を誇る帝国の第41代皇帝『エミリア・シュツルム・リ・メウエーヌ・フェイル』である。

ショートカットの美しい金色の髪、深いエメラルドグリーンの瞳、白く透き通る肌、美しさをそのまま形にしたとしか形容できない容姿をしている。

着用している純白のドレスの鎧と相まってその全てが眩いばかりの輝きを放ち国民には神皇帝として崇められ、他国には初代皇帝フェイルと同等の存在として君臨する、絶対的な支配者と認識されているようだ。

「旅の途中にも関わらず迅速に帰還くださったこと、申し訳なく思うとともに大変頼もしくも感じますわ。先程まではどちらにいらっ

「しゃったのですか？」

「セメト大陸へと渡ってました。ここに来るまでにだいたいの国の状況は探ってきましたので後で確認してください。ああ、それとただいまです。」

低姿勢な皇帝に対して適当に返す騎士。

誰がみてもおかしな光景だが2人にとっては当たり前なのか、気にした様子はない。

問題をあげるとすれば、サイトの発言にある。

セメト大陸とブルトウラ大陸は海路であれば10日、空路でも4日はかかる程離れてた位置関係にある。

更に帝国はブルトウラ大陸の中心部に位置しており、セメト大陸から帝国まで移動するにあたって必要な日数は最低でも5日である。

その距離を数時間で、他国の情勢調査さへ行っただうえでの帰還などと通常であれば到底信じられるものではない。

だが、13人目の十二騎士であるサイトはそれをやってのける。

「ええ、お帰りなさいませ。本当に頼もしいことです。さっそくですがサイト様、今回の件についてどう考えられますか？」

「あの魔力は俺たちとは違うものでしたから、多分考えている通りだと思いますよ？」

「そうですね。では、審判の日は近いということですね。」

「多分ですね。鍵は導師と神子とドラゴンでしたっけ？」

「その通りです。どの者が現れたのかはわかりませんが、希望はできてきました。存在しない最強の騎士、サイト様。私事ではありますが」

が、使命達成の為もう少しの間お付き合ってください。」

「当たり前ですよ。ここまで来たんです、最後まで付き合わせてもらいます。」

エミリアはある使命を帯びて命を授かった。

それは1人の人間には到底抱えきれるものではなく、幼少の時代には重圧に負け自ら命を絶とうとしたことが何度もあった。

もちろん、周囲の人間に止められることにより未遂で終わったのだが、度々起こる自殺願望は徐々に人々を遠ざけて行った。

そんな中、ただ1人彼女の傍を離れなかった男がいた。

それがサイトである。

使命を知って尚変わらず接する態度に徐々に惹かれていき、やがて淡い恋心を抱くまでに至った。

当時の次期皇帝という立場が邪魔をし想いを伝えることはできなかったが、そのサイトへの想いが使命につぶされない強い心を形成していった。

だが…

「ありがとうございます。最後まで…ですね。」

歪んだ強さなのかもしれない。

彼女の微笑みには一切の感情がなく、ただただサイトを空虚な瞳で見つめているのであった。

- 帝国領：陽光の街アジール：ラトラスの森：中央部：似非空間 -

「大体の動きはこんなところ。」

「ふむ、大体は予想通りだが…俺が介入した影響とかはどうなんだ

「？」

「全くない。世界が動き出す経緯と、この狼との関係は違ってるけどタイミングは同じ。でもこれから少しずつ出てくるはず。」

「そうか。ルルが死なないように介入してるんだから影響は出てくるに決まっているな。」

2人はどこにいても根底が繋がっているため離れていても共にいるようなものであり、逢いたいと思えば魔法など一切使用せず、距離も関係なく逢うことができる。

そして、現在ユウが固定した似非空間にはいつの間にかユキが姿を現し身体を密着させながらの会話をしていた。

内容はユキの調べによる世界中全ての動きについてだ。

ルルアとドートの戦闘が大規模だったことは言うまでもなくユウにも理解できるところであり、となれば国が動き出す可能性が高い。

世の中、まず必要なのはやはり情報だろう。

把握できれば動きようはいくらでも出てくる。

「帝国と灯国、それとミリタリー又国は一応は不干涉だろうな。ゲイル魔国もそこまでルルアに絞った動きは見せないだろう。問題なのはカラマ共和国か。あの国にもベンター教は布教してるんだっかな？」

「うん。まず、軍のトップがそれ。」

「まず、間違いなく狙われるな。…エルフの魔力を一時的に封印して角に宿っている魔力を循環させてみるか？あれなら純粋な魔力の塊だからいくらでも誤魔化しはきく。」

他人の魔力の循環を操作するなど熟練の魔道士や術士でも容易にできることではない。

ましてや、それが純粋な魔力ともなれば不可能に近い。

魔力とは常に乱れ、同じ流れになることはありえない不規則なものであり、一定の意志に基づいて指向性を統一することで魔法や術といった現象を引き起こすことが可能な力である。

内容量に違いはあれど誰にでも宿っている魔力だが、宿主によってその性質は異なる。

人間には人間の、魔族には魔族の、エルフにはエルフの魔力の性質があり、不規則な流れの中にも統一された部分は存在する。

純粋な魔力とはそれらに含まれない何一つ統合されていない荒れ狂う力ではない。

ユウはそれを当たり前のように操作できる。

間違いなく異常なことである。

この技術の更の上にいけば魂の根源に大きく関わるものもあり、ユキが各国の動きを調べた方法もまた魂の根源に大きく関わっている。

「…随分熱心。」

「本当の弟のように感じてきてな。」

「そう…私とどちらが大事？」

「愛情と兄心は比べるものじゃないと思うぞ？」

「…ごめんなさい。」

「謝ることじゃない。あまり気持ちを伝えない俺も悪いんだろっしな。」

「っ!？」

突然の出来事にユキはついていけなかった。

ユキの目の前にはユウの目がある。

それは言葉通り目の前でありおのずと唇も近くに…否。

唇と唇が接触している。

ほんの1秒にも満たない一瞬のキス。

「知ってると思うがこれが俺の気持ちだ。これはいつまでも変わらない。」

「うん…。」

若干の照れを含んだ優しい笑みを浮かべるユウ。

真っ赤に染めた顔を隠すかのようにユウの胸へと顔を寄せるユキ。

これらはルルアとドートが目覚めるまでの出来事である。

6話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次話も読んでいただくと嬉しいです。

7話（前書き）

少し更新が遅くなりました。

それでは7話目。
どうぞです。

7話

帝国領：陽光の街アジール：ラトラスの森：中心部 -
瘴気に満ち溢れているラトラスの森は夜の訪れが早い。

陽樹が植えられていないこと、それ以上に森そのものが光を拒否していることが要因としてあげられる。

だが、現在ラトラスの森の中心部はルルアとドートの激しい戦闘により木々が一切ない状態である。

よって、中心部から半径3キロの戦闘被害区域以外は深淵の闇といったところだ。

そんな場所に似非空間から降り立ったユウ

「さすがに周りにはもう真つ暗だな。」

『仕方あるまい。変異した陽樹は光を嫌う。』

ユウの眩きに反応したのは寝ていたはずのドートであった。

ドートは銀色に光る体毛に包まれ未だ寝ているルルアを起こさぬようそつと立ちあがるとユウの目の前までゆっくりと近づいていく。

『して、貴様のようなただの人間が何の用だ？』

完全なる敵意を持ってユウと対峙するドート。

その姿はまるで子を護る親といって差支えないものである。

「そこで寝ているのは俺の弟兼生徒だね。いや、弟子か？まあどちらでもいい。ちょっとばかり悪い夢を見ているようだから起「そつかと思つて出てきたしだいだ。」

『…っ！？なるほど、ただの人間ではないようだな。この子がこれほど強いのも納得できる。その夢はこの子に…ルルアにとって悪い影響を及ぼすものなのか？』

ドートは間違いなく強い。

その力もそうだが心もまた真っ直ぐに立ち続ける巨陽樹のように折れることのない強さを持っているだろう。

そして、強さとは相手との力量を感じ取れるものでもあり、ドートの野生の勘と合わさって自身とユウとの差を感じ取っていた。

とはいえ感じ取れたのは氷山の一角ではあるのだが…。

そして、ユウのルルアに対する感情もわずかなりとも読み取れたために素直に話しに耳を傾けることにした。

「間違いなく悪いものだな。ルル自身には関係のない悪夢なんだがな…。」

『何か知っている口ぶりだな。』

「まあな。ドートといったか？ルルが子供と重なるなら知っておけ。ルルが目標とするものは復讐だ。」

『…私と同じか。』

「まあ、ルルから直接聞いたわけじゃないがな。とはいえほぼ間違いない事だ。ああ、それとこのことは他言無用で頼む。ルルから言ってくるまで俺は知らないことにしておきたいんだ。」

『いいだろう。』

「それじゃあ、夢の中に行ってくる。自然と起きるまで絶対に起こ

すなよ？」

『何?』

突然ユウの周囲から光があふれ出した。

その光に一瞬目を奪われ、気付けばユウは消えていた。

実際に悪夢を見ているのか苦しそうにうめきをあげているルルアを心配しながらも、ユウの言葉が枷となり起こすに起こせない状況で待つしかドートに選択は残っていなかった。

- ????: 夢の中 -

生物がその一生を終えるのは大きく分類分けすると2つある。

1つは魂のすり減りによる死亡：寿命。

1つは肉体のすり減りによる死亡：自殺や殺し。

病気によるものや、老衰によるものかもしれない。

事故かもしれない、意図的なものかもしれない。

それらはどれだけ否定しても必ず訪れる、生きとし生きる者の避けられぬものである。

だが、今この場で広がっている光景はそのどちらにも属さない特異なものだった。

「ヒッ！助けてくれ！！身体が！！」

「やめろっ！！返せ！！返してくれー！！！！」

「おとうさん…お…とう…さん?…イヤァッ!？」

死ではない。

それは個の消滅。

人々が、植物が、全ての生ある者が光の粒子となる。

(また…この夢?)

粒子は皆一点を目指しゆつくりと動き出す。

(僕が(私が)初めて見た(最後に見た)光景)

一面が光に包まれ、やがて音が消え…形あるものも消えつつある。

(僕が(私が)生まれた(消失した)場所)

やがては大地さえもその姿を光へと変える。

(ああ…僕は…(私が生んだ、育んだ子供たち))

大地の光もやはり一点を目指し動き出す。

(どうして何も(消えていく…喰われていく))

その先にあるものは。

(感じないのだろう…(私自身ももう…))

光を覆い尽くす闇。

(…きつとあれを殺せば)

それは様々な生物をむりやり繋いだかのような異形の捕食者。

((全てが...))

世界全ての光が捕食者によって消えていく。
もはや誰も居なくなつた世界。
やがてはその世界さへも消えていく定めなのだろう。
空間が徐々に歪みを見せ始める。

「全く…世話がやける。俺が誰だかわかるか、ルル？」

そんな中不思議と声が響き渡つた。

(にい…さん？ (お爺様…))

「意志にお爺様と呼ばれる筋合いはない。…しかし、まだこんな幼い頃だったのか。」

おそらくはルルアなのであろう幼子を抱きとめるユウ。

その姿は幼子といえどエルフの象徴ともいえる長き耳をしっかりと確認できるものであつた。

だがルルアに本来あるべきもう一つの特徴がない。

それは、角。

幼子のルルアの額にはそれらしきものは何も確認できない。

「何にしても今は脱出が優先だな。すぐにこの悪夢から覚ましてやるからじつとしてる？お前も連れて行ってやるから離れるなよ。」

(うん (はい))

ルルアが、そして同時に聞こえる声了承の返事をする。

すると、周りに消えたはずの光が集まり、眩いばかりに輝きだし空

間の歪みは消え、徐々に崩壊していく。

悪夢からの目覚め。

それは、夢という空間の消滅と同義である。

つまり、今の状態はユウが引き起こしたものだと思えるのが妥当だろう。

「さて、もう戻っても大丈夫だな。」

空間が崩壊していく光景を見て、ルルアが目覚めつつあると判断するユウ。

現実への帰還を考えるユウだがふと目にとまるものがあつた。

「…神々を超える獣か。」

まるでその場全体が一枚の絵であるかのように空間と共に崩壊していく捕食者。

その視線の先にはユウがいる。

お互いに視線を合わせているように見えるが、実際にはそれは見当違いである。

これは夢であり、捕食者もまた夢の一部。

ルルアの記憶の再現であり、捕食者の視線の先にユウはいない。

「実際に逢うのはもうしばらくしてからだな。大丈夫。お前は救われる…じゃあな、鶴。」

ユウの言葉を聞くと、目を閉じ崩壊に身を任せていく捕食者、鶴。本当に生きているかのような行動だが、やはりそれは作り物であり本物には成りえない。

鶴が完全に崩壊する頃にはユウの姿はどこにもなかった。

- 帝国領：陽光の街アジュール：ラトラスの森：中心部 -
ルルアが目を覚まして最初に見た光景は雲ひとつなく広がる大空。
そして一面に広がる星々だった。

複数の色の輝きを放つそれは、太陽の恩恵を間接的に地上へと分け
与えてくれる。

大きな輝きを見せるもの、小さく影で輝くもの、見えていない輝き
もあるだろう。

だが、どれもが空と溶け合うかのような美しさを演出していた。

「…キレイ。」

故に出た言葉は当然、その光景の感想であった。

銀色の毛に包まれながら大空を見つめるルルア。

どうやら、ドートは改めて体毛でルルアを包み込んでいたようだ。

『目覚めたか…。』

眩き程度の音量だったのだがドートにはしっかり聞こえていたよう
だ。

いや、密着している状態の為わずかな動作に気付いたのかもしれない。
い。

ルルアと同じように空を見上げながら言葉を続ける。

『本来ならこの地は陽樹の影響で星は見えぬ。だが、この森の木々
が作り出す闇が影響する場所ならば話は別だ。…本当にキレイだな。
私たちでは到底作り出せるものではないだろう。』

「…そうですね。でも…壊すことは簡単なんです。」

『む？』

ルルアの言葉に違和感を覚えるドート。

ほんのわずかな時間の付き合いでしかないとはいえ、勘の鋭いドートはルルアの言葉がらしくないと感じる事ができた。

事実それは正しかった。

ドートの体毛を丁寧に身体から離し、そのままほんの少しの距離をとるルルア。

「こんばんわ。導かれし者。」

(導かれし者？何のことだ…だが、不思議と心に響く…。いや、今はルルアに何がおこったかだ。まるで別人だ、雰囲気も魔力も何もかもが違う。私を遥かに超えた力もっている。)()

「お答えしましょうか？」

『…心を読んだのか？』

「いいえ、顔に書いてありましたので。」

『…では、答えてくれ。』

「もちろんです。」

柔らかい笑顔を浮かべるルルア。

だが、その笑顔も普段のルルアとは違う異質なものに見える。

「まず、自己紹介ですね。私は…いえ、私もルルア・クルツ・マドラン又です。」

『私も、ということはやはり私と闘ったルルアとは別人ということか？』

「正解です。私は…コレです。」

ルルアが指で示したものは…角。

突然のルルアの豹変により気付けなかったドートであったが、意識を角に向けてみると一目見てわかる変化があった。

封印処理を施された角は不気味に輝いていた。

ドートがそれを認識すると、大きな鼓動音までもが聞こえ始め徐々に大きくなっていく。

「この子に寄生して生きながらえた別の意志です。とはいえ、この子も私の力により生きている状態ですので共存と言い換えたほうがいいかもしれませんね。」

尚も大きくなり続けていく鼓動音。

それは封印がとけつつある事の前兆であり、事実封印式が書かれた札は亀裂が入り始めていた。

それを無視し説明を続けるもう一人のルルア。

「私が表層に現れたのはおそらくお爺様が仕組んだことだと思われまますので答えは持ち合わせていません。」

『…お爺様？』

「はい、先程夢の中でお会いしましたのでその時に何か手を加えられたのではないかと思います。もうじきお見えになるのではないかと…噂をすればですね。」

途端、倒れこむルルア。
すると森の奥から先程ルルアの夢の中へと入って行ったユウが現れた。

『貴様だったか…夢の中に行くと思えたかと思うと今度は角の祖父だと？彼奴は、貴様は何者だ！いや、それよりもルルアだ！ルルアはどうなった！！』

「まあ、待て。説明するからそんなに睨むな。」

次々に起こる常識を疑いたくなる出来ごとにドートも限界寸前だったのか、ユウに痙攣を起してしまった。

「まず、角の封印を解こうとしているのは俺だ。少しばかりエルフにとって行動しにくい世の中になるからその対策の為に角の魔力を利用させてもらう。とはいえ、利用するのは一部でいいから封印は再度閉めた。」

『なるほど…再度ルルアが倒れたのはその為か。』

「そうだ。命に問題はないから心配するな。じゃあ、始めるぞ。」

ユウが右手をルルアへと向ける。
すると、周囲に広がっていた角から漏れ出た魔力の質の変化が始まる。

純粋な魔力の質を色で表わせばまさしく透明である。
それが、黄へと着色されていく。

『これは…人間質の魔力』

ドートの言葉通り純粋な魔力の質を人間のものへと変化させるユウ。それと、同時にルルアの本来の魔力が徐々に体外へと漏れ出る。その色は緑。

『まさか、魔力質そのものを入れ替える気か？』

「その通り。言っておくが無理なことじゃない。抜き出したエルフ質の魔力も人間質の魔力に変化して戻しておく。急に保有魔力が増えて慣れるまでは大変だろうがルルなら問題ないだろう。」

完全にエルフ質の魔力が体外へと排出、そして人間質の魔力に変化され、角の魔力から変化させたものと合わせてルルアの体内へ戻されていく。

『信じられん光景だな…だが、魔力の生成は変わらずエルフのままであろう？それはどうするつもりだ？』

「それも問題ない。ルルにはエルフと人間の生成器官があるみたいでな。エルフの方を閉じれば回復速度は遅くなるが慣れてくればほとんど変わらないぐらい生成できる。よし、終わったぞ。これで少なくとも戦闘で感知はされないだろう。」

『…』

もはや常識を飛び越えた技術をいとも簡単にやってのけるユウの異常性に、角に宿る意志が何者なのか、その意志とルルアとの関係性等、問い詰めたいた事が全てが吹き飛んでしまっていた。

少しばかり呆然としながらルルアを眺めるドートと、ルルアだけでなくドートの容体も視るユウ。

1人と1匹に問題が見当たらないことを確認すると森へと歩を進める。

「さて、俺はもう行く。」

『待て！貴様、名は何という？』

「そういえば名乗ってなかったな。俺はユウ・アヤマ。ルルアの兄兼先生だ。そうだ、1つお願いがあったんだ。ルルが起きたら召喚獣についてもう一度考えてやってくれないか？」

『その必要はない。もう答えはでているからな。』

「それはよかった。さて、今度こそ行くとするかな。じゃあな。」

簡単な挨拶で場を去るユウ。

再び呆然としてしまうドートであったが再びルルアを包み込み眠りについた。

その時のルルアの顔は穏やかな安心した顔だったため悪夢は覚めたのだろう。

今は、どのような夢を見ているのだろうか？

「今度は良い夢を見るよ。」

仲良く眠る1人と1匹を気配を消し眺めるユウであった。

7話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次話も読んでいただけると嬉しいです。

8話(前巻)

それでは8話目。

さしづめ。

8話

- 帝国領：陽光の街アジール：ラトラスの森：中心部 -
ルルアとドートの戦闘があつてから日付変更線を経過した。

天に昇る太陽の日差しがラトラス森一面に広がる。

木々が生い茂る周囲はやはり薄暗いが、森の中心部はその日差しを余すことなく受け取ることができる状態だ。

久しぶりの陽光に大地が喜んでいいのか魔力が満ち溢れている。

周囲に広がる瘴気が一種の結界を生み出し、魔力が外に四散することもなく留まつている為、心身を癒す絶好の場となっていた。

「ん…ん。眩しい…。」

ルルアが森での2度目の目覚めを迎える。

正確には1度目はルルア自身ではなく、別の意志とのことだが身体は共有しているため2度目との認識で間違いはないだろう。

「ん…ふう。」

大きく身体をのびし、落ち着くと周囲を見渡す。

広がる光景は当たり前前なのだが、ルルア自身が引き起こした災害級の自然破壊である。

昨日の時点では正確には認識していなかった内容に若干の罪悪感が生まれたようで、その顔はどこか影をもっている。

次に目に入ったのは自らを包み込むかのような銀色の毛である。

無意識の内にその毛をなぞっていた手を止めると自らを見つめる視線に気がついた。

「おはようございます。」

にこっ、という擬音が聞こえてもおかしくない程ににこやかな挨拶をするルルア。

昨日見た角の意志の笑顔とはやはり別物であり、これこそが正しきルルアの笑顔なのだと思えるドート。

その笑顔に対するドートの答えは優しく見つめることであつた。視線に込められたものは親愛の情。

どうやらルルアの人脈作りは時間など関係ないようだ。

『何か異常はないか？』

「少し身体が重いですが、他は…あれ？」

先程までは周囲に気がいつていたので気付かなかつた事実。

ユウが行つた魔力質の変化。

身体が重いのはその影響であろう。

『それはユウというルルアの兄を名乗る男がやつたことだ。』

「…兄さんが？魔力も増えている…あれ？そういえば夢で兄さんが出てきたような…でも、あの夢には兄さんはいないはず。」

ルルアの言葉にする必要もない明らかな疑問に答えるドートであつたが、その答えが更に疑問を生む結果となつた。

思考にふけつてゐるルルアだが、長くかかると判断したドートがユウからの言葉を簡潔に伝える。

『思考中に悪いがそのユウから伝言だ。「俺は先に帰っている、昼までに常陽にこい。」との事だ。』

「…昼？太陽の位置からすると…。」

『もつまもなくといったところだろう。』

太陽の日差しにより目が覚めたルルアであったが周囲が光を拒否する木々の為、感じた日差しは朝日ではなく昼間近のものであった。ドートならばその強靱な脚力で問題なく移動できるだろうが、ルルアはどうだろうか？

答えは普段ならば可能だが現状は不可能である。なにせ、魔力質そのものが変わっているのだ。

前例はないが常人がルルアと同じ環境に立てば魔力を身体に馴染ませるという意味合いで数日、或いは数十日は目覚めないだろう。

それを考えれば並はずれた順応性を見せているルルアだが、現在はまだ魔法の行使は難しい状態だ。

ここまでを魔力質が変化した瞬間に認識したルルアの理解力もまた、並はずれたものである。

「はあ…ここからだと言いませんね。いつそゆつくり帰ることにします。ドートさんはどうするんですか？僕としては傷が完治するまでは行動をおこしてほしくないのですが。」

『あの男の実力を考えれば完治するまでは手出しはできん。それよりルルアがしているであろう勘違いを正したいのだが。』

「勘違いですか？」

『さよう。戦闘の最後に交渉は決裂だろう、と言っていたな？なぜ決裂なのだ？私はその事について何も触れてはいないぞ。』

「貴方は止めてみる、と言いましたね？つまり、止めることができ

れば認める。そう言っているのだと判断しました。ですが、言った通りあの状況を打開する方法は僕にはなかったんです。つまり、僕は貴方にとって有益をもたらす程の力をもっていなかったということになります。だからこそ僕は交渉が決裂だと考えました。」

ルルアは淡々と語る。

全てを受け入れるエルフの血なのだろうか？

悔しさなどなく、結果のみを受け入れる。

だが、そこには過程がない。

それがルルアの認識とドートの認識を別のものとした。

『その考えからすると確かに交渉は決裂だろう。だが…』

呼吸を挟み再度ドートが語る。

『だが、私がルルアを気にいったとするならば話は別だ。』

気にいったですむものではない。

生きたいと願う心、姿勢に我が子を重ねた。

類いまれなる戦闘の才能に自らの願いを叶えてくれる可能性を見出した。

それは失った子の代わりとしてなのかもしれない。

それは都合の良い欲望の道具なのかもしれない。

だが、心に宿ったルルアへの感情は間違いなく先程視線に含まれていた親愛だった。

『私は召喚獣として契約しても良いと思っている。どうだ？』

「…僕のどの部分を気にいったのかはわかりませんが、そういうことならこちらからお願いしたいです。」

『ならばさっそく契約の儀といくか。』

「あ…すいません。今はまだ契約できないと思います。魔力が身体に馴染んでなくて陣を敷けないんです。」

『問題はない。』

ドートがルルアの言葉をを真つ向から否定すると、1人と1匹と1つにそれぞれ陣が敷かれた。

ドートによるものだろう。

召喚とは言ってしまうえば、転移魔法の一種である。

術者と召喚獣の魔力回路の繋がりにより場所を特定し、術者のもとへと呼びよせる。

言葉にすればただそれだけの内容となる。

そして、召喚獣とは契約により召喚術により呼び出される存在の総称である。

では、その召喚獣との契約はどのように行われるか。

方法は3種類ある。

1つは、召喚獣となる者を力で縛り付ける契約。

相手を負かせ、今後術者を襲うことのないよう呪術をかけられた上での一方向的な契約である。

この際、召喚時に召喚獣が抵抗をするため魔力消費が極端に増え、更に召喚獣は呪術に用いられている魔力の作用により本来の力を発揮できないというおせじにも効率の良い方法とはいえないものである。

だが、大半の召喚士はこれに当てはまる。

では、合意の上であるならばそれらは解消できるのか。

答えは解消どころか、召喚時の魔力消費は0に等しく、更に召喚獣の本来の力に加え術者の魔力の上乗せが可能な比較するのもおこが

ましい程の結果が得られる。

これが2つ目の方法、合意の上での契約である。

この合意の上での契約がルルアが考えていた方法なのだが、これは完全に術者が契約魔法を行使する上で成り立つものであり、現在のルルアには文字通り不可能と言わざるを得ない。

では、ドートが問題ないと豪語するのはなぜか。

それは、最後の契約方法の内容による。

一般的には出回っていない内容ではあるが無機物を仲介して契約することもできる。

万物には魔力が宿っており、その魔力を利用するのである。

無機物に宿る魔力を場として設け、召喚獣がその場へ自らの魔力を留まらせる。

この工程がされていけば後は術者が無機物に宿った召喚獣の魔力との間に繋がりを持たせるだけである。

だが、このままでは誰であろうと契約ができることになる。

よって、特定の人物のみが契約できるよう、術者と召喚獣、そして無機物との間での絆を結ぶ。

この方法であればルルアが人間の魔力質に慣れたころドートが傍にいらなくても契約はできる。

今回選ばれた無機物は何の変哲もない小石だった。

だが、小石に設けられた場にドートの魔力が留まると銀色に輝きだし、形も整えられた。

見る限り真珠に近い。

ルルアとドートの間に真珠が入る状態で絆は結ばれた。

『その魔力質に慣れたころにでもこの石を通して契約をすればいい。受け取ってくれるな？』

「はい。」

無機物を仲介する方法を知っていたのか、ドートの行動に驚くそぶりは見せなかつたルルアだが、どこか嬉々としている。知ってはいたものの見たことはなかつた契約方法を見ることができた喜びなのか、真珠を手にした喜びなのか…。

「さて、私は討伐されたということと身をひそめる。ルルアをその常陽？であったか。そこまで連れていければ良いのだが、さすがに他の者に見られる可能性がある以上は軽率な行動はとれぬ。すまんな。」

「貴方が気にされることはありませんよ。次に会うのはいつになるかわかりませんがそれまでお元気で。」

『お互いな。』

別れの言葉は交わさずに1人は森の入口へと、1匹は森の出口へと向かう為に暗く木々の生い茂る闇の中へと姿を消した。

- 帝国領：陽光の街アジール：ラトラスの森：出口付近 -
ルルアとドートが別れてから30分は経っただろうか。

森を抜けるのもあと少しといったところでドートは人間と出会った。胸当てに小手、モンスターの子を加工したのである。若干の魔力を宿した剣を構える男性。

その男の前に立つ全身鎧に身を包み、完全な鉄製の巨大な斧を肩に抱える長身の男性。

後ろに控えるは、簡素な胸当てによく手入れされた弓矢を構える女性。

更に後ろには、物理的な干渉を防ぐには心もとないが魔力的な干渉ならば十分な防御力を持っている魔道着らしき衣服に、先端に魔力

の宿った宝石を宿した杖を持つ女性が詠唱していた。彼らはギルドから討伐依頼を受けてラトラスの森まで訪れた。討伐対象はドートである。

ルルアは1人で討伐依頼を受けたが、パーティとしてギルドに登録すれば複数人でも依頼を受けることはできる。

そもそも高ランクの依頼を受ける場合は基本はパーティを組んでい
る者にしか割り当てられない。

今回ルルアが1人で難度：Aの依頼を受けることができたのはミ
ナの手まわしによるものだろう。

「シエル、俺と同時に切りつける！サザーブは奴の目を狙え！ミシ
ユはその詠唱を完成させたら俺の言うタイミングで発動させろ！」

「了解！！！！」

緊迫した空気が漂う中大きな声が響き渡る。

指揮するは剣を手にする男性。

それは信頼なのだろう。

3人はその指示を疑うことなく実行する。

最初に動いたのは弓矢を操るサザーブと呼ばれる女性だった。

指示通りドートの目に照準を合わせ矢を放つ。

続くはシエルと呼ばれた男性と、指示を出した張本人。

連続して放たれる矢をかすることもなく避け続けるドートの足元を

狙い剣と斧を同時に切りつける。

だが、それもまた矢と同様かすることもなく避けられる。

同じようなやり取りを何度も繰り返すうちに後ろで控えていたミシ

ユと呼ばれた女性の詠唱が完成したようだ。

「クルス君！いつでもいけるよ！」

「了解だ！サザーブ、残りの矢を全部使って少しの間でいい、完全に足止めしてくれ！シエルは俺を奴に思い切りぶん投げてくれ！」

「あいよー！」

「怪我してもしらんぞ。」

指示があるやいなや、予備として用意していた矢を全て手にし弓を構えるサザール。

「矢だつて安くないんだからね。後で…請求…するよー！」

数十本もの矢がドートへ向かって同時に放たれる。その横ではシエルがクルスをかつぎあげていた。

「へへ、頼むぜ相棒！」

「言われるまでもない。じゃあ、行ってこい！！！」

文字通りクルスをぶん投げるシエル。

その力はさすがというところか。

巨大な斧を振り回すのもうなずける。

クルスが凄まじい速さでドートへと飛びだしたと共に、サザーブの放った矢はドートへ到達しており、先程までと変わらず全て避けられていた。

目的は足止めであり、ダメージは一切期待はしていないとはいえこれにはサザーブもプライドが傷つけられた。

「ムカつく！このデカ狼がー！」

弓を捨て、腰のベルトにかけていたナイフを取り出す。

「そーりゃー!!」

そのまま、ナイフを真つ直ぐに投げるサザーブ。
これにクルスが反応する。

「ミシユ！ナイフに魔法を重ねろ！」

「わかった！発動！イグレグトミスト!!」

行使された魔法は致死性の毒を保有する霧を生み出すものである。
あまり距離の離れた位置に発動させることはできない、畏に近い形で使用することが多い魔法であり、このような戦闘の場で使用される姿はあまり見られない。

だが、そこでサザーブが放ったナイフの定番である。

毒霧に妖しく反応を示すと、霧に意志があるかのようにナイフを追尾しだした。

魔法を引き寄せる働きを付与されており、一種の魔法剣ではあるがその性質上好んで使用する者は少ない。

「毒ナイフの完成ってな！後は俺の役目…行くぞ!!」

クルスとドートの距離は目前と迫っていた。

高速を維持し右前脚を狙い渾身の力を持って切りつけるクルス。
超高密度の鉱物でも相手にしているかのような鈍い感触が剣を通して両手に伝わり思わず顔をしかめてしまう。

だが、これから起こる惨劇を想像してすぐに思考を切り替える。

「皆！離れる!!」

クルスが叫ぶと皆がドートから、正確には毒霧を纏うナイフから大きく距離を取る。

間近に迫るナイフを避けようと動くドートだったが脚が地面から離れようとしなない。

原因を探ると先程クルスにより切りつけられた右前脚が目に入った切りつけたとはいえ傷1つない、ドートにしてみればそれこそ虫に噛まれた程度のものであった。

が、真に見るべきは地面とドートを繋ぎとめているものにあった。

おそらくはクルスの斬撃によるものだろう。

斬撃の接触した部分から、地面をも巻き込む形で凍てついているのだ。

だが、彼は一切魔法を行使していない。

考えられるとすれば剣の元となったモンスターの牙の魔力がそれを成したといったところだ。

その性質を十二分に発揮させたことで、傷1つつけることができな
い相手に対して勝利ととっても過言ではない状況を作り出すことに
成功した。

「終わりだ…。」

結果で言えばナイフは避けられた。

だが、数メートルに広がる形でナイフを追尾する毒霧までは避けきれない。

そのままドートを包み込んでしまった。

「…ふう。何とかなったな。」

「はああ…、私のナイフが毒まみれに…クルス！弁償だからね！！」

「はあっ！？ミシユの魔法の援護の為だったんじゃねえのかよ！！」

「おっ、落ち着いてクルス君。サザーブさんも、あれは私の魔法だから私のせいでもあります。」

シエルは戦闘が無事に終わったことに安心し、サザーブとクルスはナイフの喪失について言い争い、それを仲介するミシユ。

先程までの緊迫した空気が嘘のような光景だ。
毒の覇者。

専門を討伐とする、有名になりつつある4人で構成されたパーティの名前であり、もちろん彼らの事である。

勇猛果敢なシエルに多彩な手を持つサザーブ、パーティの名前の由来である毒の魔法を操るミシユ、そして司令塔でありパーティのリーダーのクルス。

決定的な攻撃力には欠けるが、それを補ってあまりある連携と毒を用いた戦略により依頼遂行率は9割を超える。

つまりは、彼らはギルドでも上位に位置し且つ、いくつもの戦場をくぐりぬけてきた百戦錬磨の討伐ランカーだと言えよう。

だが、その戦場の多くは毒による討伐対象の即死により終わりを迎えており、対象の生死を確認する行動そのものが簡略されていた。それが、どうしようもなく大きな過ちとなった。

「毒…か。」

談笑する4人には聞き慣れない声が響く。

決して大きくはない声だったにも関わらずそれは4人全員の耳に確かに感じられた。

木々がそれを反響して伝えたのか、或いは脳の許容を超えたために聞こえた幻聴なのかはわからないが、何度も何度も繰り返し叩きつけるように響き渡る声。

直感が告げる。

『それも身動きを取れなくした上での即死級のもの。』

脳を理解を飛び越えてわかる。

『少しばかり戯れようかと思っていたのだが、思った以上にできる
ようだな。』

討伐対象が生きています。

『では、こちらからも仕掛けさせてもらおう。』

今までにありえなかった光景にただ固まることしかできないシエル、
サザーブ、ミシュの3人をよそにクルスはいち早く現状を受け止め
ると瞬時に理解する。

(勝てねえ…。なら、逃げるしかねえじゃねえか!!)

決断すれば後は早い。

即座に指示を出すクルス。

「ここは退く! てめえらさっさと逃げるぞ!」

「くっくっ、了解!」

クルスの指示とは言い難い、だが彼らにとってみればこれ以上ない
指示に3人もようやく現状を受け止めることができたようだ。

即座にドートに背を向け退却を始める。

この行動を彼らは後悔することとなる。

（こんな化け物に逃げ切れるわけねえだろ…じゃあな、お前ら。）

役目の名は殿。

追撃する敵を防ぐその役目の最後はほぼ決まっている。

クルスに巨大な牙が迫る。

（これなら楽に死ねそうだな。）

どこか安らかな気持ちでクルスの意識は遠のいていった。

そして、もはや意識はおろか原型すらとどめないクルスに貪りつくドート。

傷の回復に必要な栄養の摂取か、或いは純粋なモンスターの本能かどちらにせよルルアと対峙した際には、ここまでの凶暴性は見せなかった。

対話を望んだルルアと、敵意を持って正真正銘討伐に来ていた毒の覇者。

考えると当然のことかもしれない。

彼らはドートを殺すことを前提としていたのだ。

ならば殺し返すことは正当防衛となるのではないだろうか？

もちろん、人々はそれを認めないだろう。

だが、ドートにとっては正しく正当防衛であり、彼らが向かってこなければ決して危害を加えるつもりはなかった。

そして、その正当防衛は毒の覇者全員に対して行われるはずだったのだがクルスのとった行動が他のメンバーを救うという奇跡に等しい結果を生み出した。

『…3人逃がしたか。ルルアにああ言ったものの、この男の行動を見ると殺すに殺せんな。』

今もなおクルスを喰らっている姿からは考えられないがドートはクルスのとった行動に共感を覚え、だからこそ3人を逃がしてしまっ

た。
生の執着や死の恐怖を振り払い他者の為に命をかける、それは自己満足だと言われるだろう。

なにせ、残されたものの感情を全く考えていない。

だが、ドートも我が子の為ならばその自己満足の行動をとってしま

うだろう。

結局は何が正しいのか、何が悪いのかは誰にもわかることではなく、そもそもが答えなどないのかもしれない。

だからこそ皆、自らが決断した道をただ走り続ける。

結果：毒の覇者の頭脳たるクルスはこの世から姿を消すこととなった。

残された者が誓うは復讐。

復讐の対象となる者が誓うもまた復讐。

世界は少しずつ闇に染まっていく。

8話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次話も読んでいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7533u/>

導きを導く者

2011年10月4日17時47分発行